

明・景泰帝の帝号復活について

滝野 邦雄

はじめに

景泰八年（天順元年）一月十六日のいわゆる奪門の変によって英宗が復辟すると、弟の景泰帝（郕王）は帝號を廃されてもともと^のの郕王の地位に引き戻される。天順元年二月十九日に亡くなると、郕王として「戾」字が諡として英宗から贈られる（拙稿「明・景泰帝の諡号「戾」について」（『経済理論』第384号）参照）。

つづいて景泰帝（郕王）によっていちどは廢嫡された英宗の皇太子（憲宗成化帝）が即位すると、郕王（景泰帝）を明朝歴代の皇帝を祭祀する廟（宗廟）に入れることは認めないものの、「皇帝」と名乗ることだけは復活させ、皇帝としての尊号・諡の「恭仁康定景皇帝」が贈られる。ただし、「郕王」としての「戾」という諡はそのままであった。

『明史』では、帝號復活（「皇帝」と名乗ることを復活させる）にいたる経緯を、つぎのようにのべる。

高瑤、字は庭堅、閩縣の人。郷舉より荆門州學の訓導と爲る。成化三年五月、抗疏（皇帝にたいして上書して直言する）もて十事を陳ぶ^の。其の一に言う、正統己巳（正統十四年：一四四九年）の變、先帝（英宗）北狩し、陛下（憲宗成化帝）方に東宮に在り。[その時]宗社 危きこと一髮の如し。郕王（景泰帝）の統を繼ぎ、國に長君有るに非ざらしむれば、則ち禍亂 何に由り平らかならん、鑾輿（天子）何に由り返らん。[景泰帝の治世の]六・七年の間、海宇 寧謐（安定して平靜）にして、元元（庶民）業を樂しむ。厥の功は細^{わづか}ならず。先帝（英宗）復辟するに迫^{おそ}り、天功（帝王を稱賛する功業）を貪る者は遂に厚誣^①を加え、其の終わりを正しくするを得ざらしむ。節惠（簡略にする）にして[郕王（景泰帝）を]躋祀（祭祀）し、未だ[正式の]典禮を稱（舉行）せず。望むらくは特に禮官に敕して集議（共に評議）し、廟號を追加し、親親の恩を盡さんことを、と。章 下され、廷議 久しく決せず。[成化三年]十二月に至り、始めて奏すらく、廟號を追崇するは、臣下の敢えて議を擅にするに非ず。惟だ陛下（憲宗成化帝）の裁決あるのみ、と。而して左庶子の黎淳 力めて争いて、當に復すべからずと謂う。且つ言う、[高]瑤の此の言 死罪有ること二つ。一は先帝（英宗）を誣^{そし}りて不明（賢明でない）と爲す。一は陛下（憲宗成化帝）を不孝に陷る。臣（黎淳）以うに[高]瑤の此の舉は、郕王（景泰帝）を尊^{うやま}わんと欲するものに非ず、特に羣邪の進用（選拔）の階（いとぐち）と爲すのみ、必ず小人の之を主とする者有りと謂う、と。帝 曰く、景泰の往過は、朕（憲宗成化帝）未だ嘗て

意に介せず。豈に臣子の當に言うべき所ならんや。〔黎〕淳 此の奏を爲すは獻諂（媚び諂う）して希恩（恩寵を冀う）を欲するや、と。議 遂に寝む。然れども帝（憲宗成化帝）終に〔高〕瑤の言に感ず。之を久しくして、竟に郕王（景泰帝）の帝號を復す・・・（『明史』卷一百六十四・列傳第五十二・「高瑤」・二十四葉～二十五葉：『明史彙』列傳第五十・「高瑤」・十六葉～十七葉は、黎淳の批判を具体的に引用する以外は、ほぼ同文）。

①『左傳』成公三年に「賈人曰、吾無其功、敢有其實乎。吾小人、不可以厚誣君子（賈人 曰く、吾其の功無し、敢て其の實を有せんや。吾小人、以て厚く君子を誣う可からず）」。

高瑤、字は庭堅で、福建閩縣の人。舉人から荆門州學の訓導となる。成化三年（一四六七）五月に疏文を奉って十事を述べた。そのひとつに、「正統十四年の土木の變で、先帝（英宗）は北に行ってしまわれ、陛下（憲宗成化帝）はちょうど皇太子の地位におられました。その時、国家は非常に危険な状態にありました。郕王（景泰帝）が帝位につき、国家に年長の君がいられっしやらなければ、禍乱は何によって平らいでしょうか、先帝（英宗）は何によってご帰還なさったでしょうか。景泰帝の治世の六・七年の間、国内は安定し、庶民は楽しく本業に従事しました。その功績はわずかなものではありません。先帝（英宗）が帝位に復帰されることになって、先帝（英宗）からお褒めをいただきたい者たちは、ひどく郕王（景泰帝）そしり、その終わりを全うさせませんでした。簡略に郕王（景泰帝）の祭祀を行い、いまだに正式の祭禮を挙行していません。特に禮部にお命じになって議論させて、廟號をお加えになって（明朝歴代の皇帝の廟（宗廟）に配置する）、親族への恩情をお尽くしになることを願っております」とあった。上奏文が憲宗成化帝から下されたものの、朝廷内の議論は長らく決まらなかった。成化三年十二月になって、はじめて「郕王（景泰帝）の廟號については、臣下の勝手に提案するものではありません。ただ陛下（憲宗成化帝）の裁決によるのみでございます」と上奏された。すると、黎淳が廟號を贈るべきではない（明朝歴代の皇帝の廟に配置すべきでない）、という。そうして「高瑤の提案は、死罪に相当することがふたつあります。ひとつは、先帝（英宗）を賢明でないとそしったこと、ひとつは陛下（憲宗成化帝）を不孝者に落としたことです。臣（黎淳）が思いますに、高瑤のこの提案は郕王（景泰帝）を敬うことを求めるものではありません。ただ邪臣たちの拔擢のいとぐちとなるだけのものです。必ずこのことを操っている小人がおります」という。それに対して、憲宗成化帝は、「景泰の過去の過ちは、これまで意に介したことはなかった。いったいこうしたことを臣下が言うべきことであろうか。黎淳が高瑤批判の上奏を行なったのは、媚び諂って、恩寵を願うことを求めるものである」という。そうして、議論はおさまった。しかし、憲宗成化帝は、高瑤の提案に心動かされ、しばらくしてとうとう郕王（景泰帝）の帝號（「皇帝」と名乗ること）を復活させた、という。

高瑤が提案した帝號の追加とは、郕王（景泰帝）を明朝歴代の皇帝を祭祀する廟（宗廟）に入れて祀るということを意味する。また、憲宗成化帝の命じた帝號の復活とは、明朝歴代の皇帝を祭祀する廟（宗廟）に入れることは認めないものの、「皇帝」と名乗ることだけは復活さ

せるというものであった。

『明史』では言及されないが、郕王（景泰帝）の廟號についての議論（皇帝を祭祀する廟（宗廟）に入れるか入れないかについての議論）が行われた成化三年から三年後の成化六年八月十日に楊守隨が皇帝から王に格下げになった郕王（景泰帝）に贈られた諡の「戾」字の変更を提案する。だが、これは認められない。ところが、その五年後の成化十一年十二月十三日になって郕王（景泰帝）を帝と称することを認め、皇帝として「景」という諡が贈られる。ただし、郕王に贈られた諡の「戾」はそのままであり、廟號を与える（皇帝を祭祀する廟（宗廟）に入れる）ことも認められなかった。

こうしたことを含めて、時代順に並べてみると、つぎようになる。

成化三年五月十八日：高瑤から、郕王（景泰帝）の廟号についての提案。

成化三年十二月八日：集議するもなかなか結論が出せず、憲宗成化帝の決裁にゆだねる。

黎淳が高瑤の提案を批判。

憲宗成化帝が黎淳と高瑤とを批判する。

成化六年八月十日：楊守隨が郕王（景泰帝）の「戾」字の諡號の変更を提案する。

成化十一年十二月十三日：帝號を復活するよう命ずる。ただし、廟號は与えられない。

英宗が郕王（景泰帝）に贈った諡の「戾」はそのまま。

本稿では、こうした憲宗成化帝による郕王（郕王景泰帝）の帝號復活についての諸問題を検討したい。そのために（一）で、郕王（郕王景泰帝）の廟號についての高瑤の提案と黎淳の批判、そして楊守隨の諡號についての提案について、（二）で帝號復活の命令が唐突に出された理由を、（三）で帝號復活の命令について考えてみるつもりである。

（一）

成化三年五月壬午（十八日）に湖廣門州學訓導の高瑤（字は庭堅。福建閩縣の人。舉人）が、郕王（景泰帝）の廟号についての提案を行なう。その内容は、「實錄」によれば、つぎのようなものであった。

湖廣門州學訓導の高瑤〔以下のように〕上言す。正統己巳（正統十四年）の變、先帝（英宗）既已に北狩し、皇上（憲宗成化帝）方に東宮に在り、虜騎 都城に薄り、宗社 危きこと一髮の如し。郕王（景泰帝）の統を繼ぎ、國に長君有るに非ざらしめば、則ち禍亂 何に由りて平げられん、黠虜（狡猾な虜）何に由りて服せん、鑾輿 何に由りて還らん。〔景泰帝の治世の〕六・七年の間、海宇 寧謐にして、年穀 屢しば豊かなり。元元（庶民）業を楽しむ。其の功 小ならず。夫れ先帝 復辟するに迫り、其の天功を貪り以て己の力

と為す者は、遂に厚誣^①を加え、其の終わりを正しくするを得ざらしむ。節惠（簡略にする）にして「郕王（景泰帝）を」隣祀（祭祀）し、未だ「正式の」典禮を稱（舉行）せず。人心 猶お鬱たり、天意 知る可し。昔し周公 身もて武王に代わるの功有り、三叔（管叔・蔡叔・霍叔：蔡沈『書經集傳』による）流言するに及び、「周公は」避位（辭職）して「国の」東に居す。「すると」、「天 威を動かし、以て周公の徳を彰かにす」（『書經』金縢）るを致す。成王 警悟（警告され悟る）し、遂に親から之を逆えて、「郊（国都の郊外）に出づ。「天 乃ち雨ふりて」風を反し^②」、感應すること響くが如し。今者、災異 迭^いごも^こも見^{あら}わるは、乃ち「天 威を動かし、亦た以て郕王（景泰帝）の功を彰かにす」る無けんや。伏して望むに皇上 禮官に特勅し、集議して廟號を追加し（明朝歴代の皇帝を祭祀する廟（宗廟）に合祀する）、以て親親の恩を盡さんことを。「そうすれば」則ち倫紀 以て厚く、天心 回^{かえ}す可きなり、と。事 禮部に下り、之を議す（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏徳聖孝純皇帝實録』卷之四十二・「成化三年五月壬午（十八日）」条）。

①『左傳』成公三年に「賈人曰、吾無其功、敢有其實乎。吾小人、不可以厚誣君子（賈人曰く、吾 其の功無し、敢て其の實を有せんや。吾小人、以て厚く君子を誣う可からず）」。

②高瑤が用いる『書經』金縢の周公の故事は、蔡沈の『書經集傳』の解釈に従う。

高瑤が以下のような意見書を提出した。「正統十四年の土木の變で、先帝（英宗）は北においてになり、陛下（憲宗成化帝）はちょうど皇太子の地位におられ、虜騎が都城にまで迫ってまいりました。国家は非常に危険な状態にありました。郕王（景泰帝）が帝位につき、国家に年長の君がいらっしゃらなければ、禍乱は何によって平らいでしょうか、狡猾な胡は何によって恐れ入りましたでしょうか、先帝（英宗）は何によってご帰還なさったでしょうか。景泰帝の治世の六・七年の間、国内は安定し、穀物はしばしば豊作となり、庶民は楽しく本業に従事しました。その功績は小さなものではありません。それなのに先帝（英宗）が帝位に復帰されることになり、その天意を自分の功績にしたい者たちは、先帝（英宗）からお褒めをいただきたくて、ひどく郕王（景泰帝）そしり、その終わりを全うさせませんでした。簡略に郕王（景泰帝）の祭祀を行ない、いまだに正式の祭禮を挙げておりません。人々の気持ちは、憂鬱となり、天意も知るべきであります。むかし周公は病氣となった武王の身代わりになりたいと祈り、武王の病を治したという功績がありました。管叔・蔡叔・霍叔がデマを流すと、周公は辭職して国の東に移りました。すると、天はその威力を示し、周公の徳を明らかにしました。成王は、その天からの警告を悟り、とうとうみずから周公を国都の郊外に出迎えました。すると「天はやがて雨を降らせ」、風向きを変えた、といひます。天と人が相い応ずること響くようです。いま、災異が繰り返して起こるのは、天がその威力を示し、また郕王（景泰帝）の功績を明らかにしていることではないのでしょうか。特に禮部にお命じになって議論させて、廟號をお加えになって（明朝歴代の皇帝を祭祀する廟（宗廟）に合祀する）、親族への恩情をお尽くしになることを伏して願っております。そうすれば、人として守るべき倫紀もこまやかなものとなり、

天の心にも応ずることができますでしょう」という。提案は、禮部に下して議論させた。

郕王（景泰帝）は、皇帝にあったとき功績があった。だが、先帝（英宗）の復辟にあたって、その復辟の功績を自己のものとしたい者たちが、郕王（景泰帝）をそしり、明朝代々の皇帝の廟で祭祀することを阻止した。いま、災異が繰り返し起こるのは、郕王（景泰帝）の功績を再考するようにとの天意ではないか。そこで、郕王（景泰帝）に帝號を贈って明朝歴代皇帝の列に加えて祭祀して、親族への恩情を示してほしいと提案するのである。

この高瑤の提案は、成化三年五月壬午（十八日）に提出され、禮部で議論が命ぜられる。ところが、その禮部の回答は、半年以上たった成化三年十二月庚子（八日）に提出される。憲宗「實錄」によると、その検討結果は、つぎのようなものであった。

〔成化三年十二月庚子（八日）〕禮部等の衙門 訓導の高瑤の奏する所の「景泰」の廟號を追加するの事を會議す。兪みな 謂う、郕王 位を繼ぐの六七年間の行事は具に「實錄」に在り。其の廟號は臣下の敢えて輕々しく議する所に非ず。自から上裁（皇帝が決裁する）せんことを請う、と（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之四十九・「成化三年十二月庚子（八日）」条）。

成化三年十二月庚子（八日）〕禮部等の役所で、訓導の高瑤が奏上した景泰帝に廟號を贈ってもらいたい（明朝歴代の皇帝を祭祀する廟（宗廟）に合祀する）という議案について會議した。皆は、「郕王（景泰帝）が帝位に在った六・七年間の行事は、すべて「實錄」に記載されております。その廟號は、臣下の勝手に提案するものではありません。ただ陛下（憲宗成化帝）の決裁をお願いしたいと思います」とのべた、という。

廟號について（明朝歴代の皇帝を祭祀する廟（宗廟）に合祀する）は、憲宗成化帝のお考え次第だと回答したのである。そして「實錄」では、この回答に続けて、高瑤の廟號を贈る（明朝歴代の皇帝を祭祀する廟（宗廟）に合祀する）という提案に対する黎淳（字は太樸，号は樸菴先生，諡は文僖。湖廣華容の人。永樂二十一年（一四二三）～弘治五年（一四九二）。天順元年丁科（一四五七）の狀元）の批判を載せる¹⁾。

左春坊左庶子の黎淳 奏（皇帝に奏本を提出）して曰く、正統十四年八月に陛下（憲宗成化帝）を冊立して皇太子と為す。九月に至り、羣臣 又た郕王（景泰帝）を奉じて帝位に即け、景泰と改元す。陛下（憲宗成化帝）の皇太子と為るは前に在り、郕王（景泰帝）の帝位に即くは後に在るに緣り、事理さまた 礙さまたげ有り。天順元年正月に英宗睿皇帝 復位するに至り、欽しみて聖烈慈壽皇太后（宣宗宣德帝の皇后孫氏：英宗の生母）の聖旨に遵い、仍お復た景泰もて郕王（景泰帝）と為す。詔もて天下に告げ、永しえに遵守せよと為す。然る後に人倫正しく天理を得、名正しく言順い、事成る。高瑤の建言（建白）は乃ち郕王（景泰帝）に廟號を加えん（明朝歴代の皇帝を祭祀する廟（宗廟）に合祀する）と欲するなり。臣（黎淳）惟うに朝廷は既に皇太子を立てれば、則ち異時（以後）天子の位に居るは乃ち皇太子なり。曾て未だ半月ならずして羣臣 又た一の親王を立てて天子と為す。則ち前時

の立つ所の皇太子は將に何をか為さんや。[こうしたことから] 此れ景泰三年の皇太子の廢するは由然（理由）有るなり。[しかし] 當時に在りては「主^{おきな}少く、國疑い」^①、四方多事と曰うと雖も、然れども周の成王の時、姬旦（周公旦：姓は姬、名は旦）は實に有功の叔父なるも、何ぞ遂に天位を取らざらんや。神器（帝位）久しく虚しく、人無かる可からずと曰うと雖も、然れども共和の際、周[公旦]・召[公奭]は皆な王國の懿親（親族）なるも、何ぞ共に姬室を分かつたざらんや。[それは] 特に君臣に定分有るを以て敢てせざるのみ。凡そ此の若き者は、皇太子 君と為し、親王 臣と為すなり、天經地義・民彝物則^③の截然と一定なること、固より智者ありて而して後に之を知るを待たず。今、多官 會議するも、依違（ためらう）・苟簡（粗略に取り扱う）にし、^{まった}略く定見（しっかりした意見）

- ✓ 1) 後の史料であるが、『明史藁』・『明史』によれば、黎淳の意見は憲宗成化帝におもねったものであり、郕王（景泰帝）を前漢の昌邑王や前漢末の更始に比べたところは、「士論の薄む所と爲る」であったとする。

黎淳、[湖廣]華容の人。天順元年の進士第一なり。官は南京禮部尚書に至る。頗る名譽（名望と聲譽）有り。其の[高]瑤と郕王の廟號を争うや、専ら憲宗の意に阿らんと欲す。[漢の]昌邑・[漢の]更始を以て景帝（景泰帝）に比べるに至りて、士論の薄む所と爲る……（『明史藁』列傳第五十八・「高瑤」・十七葉：『明史』卷一百六十四・列傳第五十二・「黎淳」・二十五葉も同文）。

黄雲眉の『明史考證』は、黎淳は「廉慎守法（清廉で法を守る）にして苟同（輕率に同意する）を爲さない」人物であったものの、郕王（景泰帝）についての議論は、「士論の予さざる所と爲」ったため、倪岳の撰した「黎文僖公傳」（『青谿漫稿』卷二十四）には、言及されていないという。ちなみに、孝宗「實錄」に附された黎淳の「小傳」にも言及がない。

按ずるに[黎]淳の[「漢の」昌邑王 既に廢され、未だ復して漢某帝と爲すを聞かず。更始 既に廢され、未だ復して漢某王と爲すを聞かず]云云と謂うは成化三年十二月の『實錄』に見ゆ。又た[黎]淳の一生は廉慎守法にして苟同（輕率に同意する）を爲さず、詳しくは倪岳の撰する所の「黎文僖公傳」『青谿漫稿』に見ゆ。而して[その「黎文僖公傳」のなかで]獨り郕王（景泰帝）の廟號を争うの事に及ばざるは、則ち亦た其の士論の予さざる所と爲るを以てのみ。餘は弘治五年四月の『實錄』の[黎]淳傳を參閱す可し（中華書局一九八五年刊『明史考證』第五冊・一三四九頁・明史卷一百六十四（列傳第五十二）考證・高瑤「附黎淳 其與瑤其與瑤争郕王廟號也、專欲阿憲宗意、至以昌邑・更始比景帝、爲士論所薄」条）。

- ①孝宗「實錄」に附された黎淳の「小傳」によると以下のようである。

致仕する南京禮部尚書の黎淳卒す。[黎]淳 字は太樸、湖廣華容縣の人なり。天順元年進士第一に擧げられ、翰林院修撰を授かり、『大明一統誌』を修むるに預かる。成化二年、秩滿 左春坊左諭德に陞る。三年、「英宗實錄」成り、左庶子に進む。十三年、『續資治通鑑綱目』を修む。[それが]成りて、詹事府少詹事に遷り翰林院侍讀を兼ね。十四年、吏部右侍郎に陞り、二十二年、南京吏部に改めらる。二十三年、滿九載、左侍郎に遷り、正二品俸を加えらる。弘治元年、南京工部尚書に陞り、尋いで禮部に改めらる。又た三年、疾を以て致仕を請うを得、是に至る。卒年七十、祭葬を賜うこと例の如くし、「文僖」と諡さる。[黎]淳 性耿介にして人と合うこと寡なし。流俗の奢侈^{うれ}を患い、凡そ婚喪燕飲、皆な則有り。其の取予（物品の授受）^{なわとり}苟にせず。門生の尹華亭有り、紅雲布を以て寄す。[黎]淳 受けず。即ち封識の上に書いて曰く、古の令爲るや、茶を抜きて桑を植ゆ。今の令爲るや、布を織りて花を添う。吾 此の妖服を用いざるなり、と。[黎]淳の剛簡嚴重なこと大臣の體有り。事に臨みて議論し、激して随わず、然らば（そのような時には）形跡（嫌疑）を避達して畏慎（戒めて謹慎する）を過ぐ（やりすぎにする）。詩文 閎博（知識が豊か）にして、時の稱する所と爲る。子の民牧（弘治三年庚戌科（一四九〇）三甲一百一名の進士）・民表（成化二十年甲辰科（一四八四）二甲九十名の進士）皆な進士に擧げらる（『大明孝宗建天明道誠純中正聖文神武至仁大德敬皇帝實錄』卷之六十二・「弘治五年四月戊午」条）。

無し。猶お聖聽を煩瀆（煩わす）し、自から上裁（皇帝の決裁）するを取らしめんと欲するがごとし。[こうしたことは] 豈に臣愚（黎淳）の能く諭す所ならんや。先帝（英宗）の明なるは日月に並び、此の事 處置されて已に久しく、人心 已に定まる。今、若し誤りて高瑤の言を聽き、一に郕王に廟號を加えれば、必ず將に太廟に祭告（報告の祭祀を行なう）して舊制を改易して、祔廟（祖先の廟に合祀する）・承祧（廟の木主を繰り上げて遷す）の禮を行なわんとし、必ず將に梓宮を遷放し山陵を改造し、珠襦玉匣（帝王の殮服）の典を加えんとし、必ず將に皇太后・皇后の稱を追贈せんとす。[そして]、必ず當に盡く當時の用いる所の人・行なう所の政を復すべしとす。且つ高瑤の此言は死罪二有り。一は先帝を誣（そし）りて不明と為し、一は陛下を不孝に陥いる。古の聖賢の經史は、眞（つぶ）さに『春秋胡氏傳』の「魯隱公」の「内は國を先君に承けず、上は命を天子に稟けず、諸大夫 己を抜きて以て立てて、遂に立つ、是れ爭亂の造端（発端）に與かる」（『春秋胡氏傳』卷第一・隱公上・「春王正月」条）に在り。故に『春秋』の首に「元年春王正月」と書し、而して「公即位」を削る、大倫を正せばなり。[それによると] 郕王の即位は、内に國を何れの君に承け、上は命を何れの主に稟けん。羣臣の己を抜きて以て立ち、而して遂に立つに過ぎず。之を隱公に律（推し量る）すに、允合（符合）異なる無し。人の君父（天子）と為りて、『春秋』の義に通ぜざる者は、必ず首惡（惡事の首謀者）の名を蒙る。是の故に[漢の] 昌邑王 既に廢され、未だ復して漢某帝と為すを聞かず。更始 既に廢され、未だ復して漢某王と為すを聞かず。誠に敢て『春秋』に悖逆（もとより逆らう）し、不明（賢明でない）の過を移して先君に加えず、孝道を子孫に全うせんと欲すればなり。陛下（憲宗成化帝）の昔 皇太子と為るは正しく言 順うなり。誰が私議（個人で議論する）するを得んや。郕王（景泰帝）乃ち敢て之を廢して、易うるに己の子を以てし、先帝（英宗）をして久しく幽閉に遭わしむに至る。此れ郕王（景泰帝）の自から為す所に非ざるなり。當に館閣に侍するの大臣の陳循（字は德遵、号は芳洲。江西泰和の人。永樂十三年乙未科（一四一五）一甲一名の進士：英宗の正統九年四月から景泰八年（一月十六日の英宗の復辟まで断続的に内閣大學士）等 富貴を貪圖（追求）し、密かに姦謀（奸邪な計謀）を運せ、從吏（屬吏）之を為すなり。天順元年に至り、郕王（景泰帝）疾有り。陳循 自から合迎し、先帝（英宗）に復位を請うも、却って乃ち羣臣を率領（帶領）し、本奏（奏本）を進め、[その奏本で] 早に元良（太子の代稱）を選び、東宮に正位（正式に登位）せしめんことを乞う。當時、皇太子は見在（存在）す。[陳循は] 何人を選ばんと欲するや。臣の愚見を以てするに、若し南城迎駕の功に非ざれば、先帝（英宗）終に出路無し。但だ此の迎駕（天子の車駕を迎える）するの人、又た皆な國の富貴を貪るの小人なり。既に微勞（ささやかな功績）を效し、氣盈ち志滿ち 驕奢淫佚（驕り高ぶり、節度がないこと）為さざる所なし。[しかし] 是の[英宗の復辟にかかわった] 故に[天順] 元年に高爵（高い爵位）・厚祿（厚い俸禄）・封公・封侯さる。[その] 尊顯（尊貴の地位）たる所以の者は、

其の迎駕の功を賞されればなり。[また] 嚴刑峻法（厳しい法と刑罰を施行する）もて、或いは斬とさる、或いは流とされ、後來に誅戮（誅殺）さる所以の者は、其の驕矜（おごり高ぶりうぬぼれる）の罪を罰するなり。今、國中に流言ありて必ず曰く、「先帝（英宗）此の諸人の迎駕するあるも、之を罪するを怒る」と。[しかしそれは] 則ち萬に此の理無く、信ずるに足らず。陛下（憲宗成化帝）即位の初め、有罪の羣邪 寒心（恐れおののき）破膽（肝をつぶす）す。[憲宗成化帝の成化三年二月に] 商輅を取回し、仍^なお舊職もて内閣に辦事するに復するを見るに及びて、然る後に欣然として自から以て計を得と為す。又た皆な私竊（ひそかに）進用（選拔任用）さるるを效慕（羨望）し希求（乞い求める）す。彼の小人なる者も、但だ己に官するを得んと欲するのみ。豈^あに顧だ患を人に貽^{おこ}らんや。臣（黎淳）以謂^{おも}えらく、高瑤の此の舉は郕王（景泰帝）を尊禮（敬重）せんと欲するに非ざるなり。特に羣邪の進用の階（いとぐち）と為すのみなり。必ず小人の之を指使する者有り、然らざれば彼の草茅（民間）は疎遠にして、安くんぞ敢て妄言して先帝（英宗）の明なるを誣^{そし}るを上つり、後世をして之を觀るに以て口實（話し種）と為さしめん。而るに今の議する者、亦た豈に察せざる可けんや。此れ[高瑤の疏文の提出を] 隱忍（耐え忍ぶ）曲從（自分の意志を曲げて従う）して猶お陛下（憲宗成化帝）の聽を煩わさんと欲するならんや（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之四十九・「成化三年十二月庚子（八日）」条）。

①『史記』孫子吳起列傳に「[田] 文曰、主少國疑、大臣未附、百姓不信[田] 文 曰く、主少^{おきな}く國疑い、大臣未だ附せず、百姓信ぜず」……」。

②『左傳』昭公二十五年に「夫禮、天之經也、地之義也（夫れ禮は、天の經なり、地の義なり）」。また、『孝經』三才に「夫孝、天之經也、地之義也（夫れ孝は、天の經なり、地の義なり）」。

③『詩經』大雅・蒸民に「天生蒸民、有物有則、民之秉彝、好是懿德（天 蒸民を生ず、物有れば則有り、民の秉彝^{へい}、是の懿德^{いどく}を好む）」。

④『禮記』曲禮下に「公事不私議（公事は私に議せず）」。

左春坊左庶子の黎淳が皇帝に奏本を提出して以下のようにのべる。正統十四年八月に陛下（憲宗成化帝）を立てて皇太子とし、九月になって群臣は郕王（景泰帝）を奉って帝位につけ、「景泰」と改元いたしました。陛下（憲宗成化帝）が皇太子とされましたのが先で、郕王（景泰帝）の即位はその後になりますことから、物事の道理の上から郕王（景泰帝）の即位はもともと差し障りがありました。天順元年正月に先の英宗睿皇帝が復辟されることになり、聖烈慈壽皇太后（宣宗宣德帝の皇后孫氏：英宗の生母）の聖旨にしたがって、景泰帝をもととの郕王といたしました。そして詔を天下に出して、郕王がその地位にいることを、永遠に順守するようになさいました。そのおかげで、人倫（人と人との秩序）は正しく、道理を得て、名義は正しく、主張も筋が通り、事が成就いたしました。ところが、高瑤の建言は、郕王（景泰帝）に廟號を加えてもらいたい（明朝歴代の皇帝を祭祀する廟（宗廟）に合祀する）というもので

す。臣（黎淳）が考えますに、朝廷では郕王（景泰帝）即位より前に、皇太子（憲宗成化帝）さまを冊立しておりましたので、後に帝位に就かれるのは皇太子（憲宗成化帝）さまになります。なのに半月もたたないうちに、群臣はべつの親王（郕王：景泰帝）を立てて天子といたしました。それでは、その前に立っておられた皇太子さまはどういった役目をなさるのでしょうか。[こうしたことから] 景泰三年に皇太子さまを廃止して郕王（景泰帝）自身の子供を皇太子としたのは理由があったわけです。しかし当時は、[英宗の皇太子（憲宗成化帝）が即位したならば、] 主君が幼く国のものたちが不安に思い、四方が多難であったからだとしても、周の成王の時の場合は、周公旦は功績のある叔父でありながら、幼少の成王を押し退けてどうして即位しなかったのでしょうか。帝位に就く人はおらず、人がいない状態ではいけないというとしても、周の共和の時の場合は、周公旦・召公奭は皆な王族でありながら、どうして国を分割しなかったのでしょうか。それは、君臣の間に定まった分というものがあり、あえてしなかったためです。このような分とは、皇太子を君主とし、親王を臣とするものでございます。天地の不変の大義や民の彝（正しい常久の道）物（事）の常道がはっきりと決まりきっていることは、智者が先に理解して、その後にはじめて分かるようなものではございません。いま、多くの官僚たちが会議しておりますが、ためらったり、粗略に取り扱ったりして、まったくしっかりとした意見がありません。まるで陛下のお耳を煩わせて、陛下ご自身で決裁していただこうと望んでいるかのごとでございます。こうしたことは、どうして私のような愚かな臣（黎淳）が申し上げることでございますでしょうか。先帝（英宗）の明察は日月に並び、郕王（景泰帝）の廟號のことは、以前に決定がなされており、人々も納得しております。いま、もしも高瑤の意見を誤ってお聞きになって、郕王（景泰帝）に廟號を加えられるのならば、必ず太廟に祭告して制度を改め、祔廟（祖先の廟に合祀する）・承祧（廟の木主を繰り上げて遷す）の儀礼を行なわねばなりません、また、郕王（景泰帝）の梓宮を移して[皇帝の形式の] 山陵を作り直し、珠襦玉匣（帝王の殯服）の儀式を加えねばなりません。郕王（景泰帝）の生母や妃に称号を追贈しなければなりません。そうして、必ず郕王（景泰帝）当時の人々や行われた政策を再評価しなければなりません。そのうえ、高瑤の発言には死罪に相当するものがございます。ひとつは、先帝（英宗）をそしり賢明でないとしたこと、ひとつは陛下（憲宗成化帝）を不孝者に落としたことです。古の聖人や賢者の經書や史書の要点は、くわしく『春秋胡氏傳』で述べる「魯の隱公が内には国を先君から継承せず、上は天子から継承の命を受けず、諸々の大夫に勝手に引っ張り出されて立てられ、そして即位する。これは、騒乱の始まりに関わってくる」という解釈にございます。したがって、『春秋』の首に「元年春王正月」と書いてはいるものの、「公（隱公）即位」とあったであろう箇所を孔子は削られました。大倫（父子の親・君臣の義・夫婦の別・長幼の序・朋友の信）を正すためであります。それにあてはめてみますと、郕王の即位は、内には誰から継承し、上には誰からの継承の命を受けたのでしょうか。群臣が引っ張りだし立てて、そして即位する。これを魯の隱公に推し量っても、符合して異なることはあり

ません。人の天子となって、『春秋』の義に通じないものは、悪事的首謀者の名前をこうむります。ここから、漢の昌邑王は、帝位を取り消されてから、名称を復活して漢の某帝とされたと聞いたことはございません。更始（漢の淮陽王）は、[光武帝が即位すると]廃されて、名称を復活して漢の某王とされたと聞いたことはございません。これは、ほんとうに敢えて『春秋』の義に背き逆らい、賢明ではないという過ちを先君に加えず、孝の道を子孫に全うさせようとするためであります。陛下（憲宗成化帝）が、むかし皇太子となられたのは、名義は正しくきわめて妥当なことでした。誰がひそかに取沙汰するものでしょうか。なのに、郕王（景泰帝）は、その陛下（憲宗成化帝）を廃して、自分の子を皇太子にし、先帝（英宗）を長い間幽閉されました。これは、郕王（景泰帝）自身がなさったことではありません。翰林院に控えておりました大臣の陳循などが富貴を追い求め、ひそかに邪悪な陰謀をめぐらせ、屬吏が実行したのでございます。天順元年になって、郕王（景泰帝）は病になられました。陳循は、自分から先帝（英宗）に迎合して、先帝（英宗）の復位を願いでて、かえって群臣を率いて、奏本を提出し、太子（郕王（景泰帝）の立てた見済の没後、皇太子は空位となっていた）を選び、正式に[皇太子（憲宗成化帝）以外の人物を]皇太子に登用させることを願い出しました。当時、皇太子（憲宗成化帝）は現実にはいませんでした。なのに、陳循は誰を選ぼうとしたのでしょうか。臣（黎淳）の愚見をもってしますに、もしも南城迎駕（奪門の變）の功績がなければ、先帝（英宗）は、最後まで幽閉先の門をお出になることはなかったかと思います。しかしながら、奪門の變にかかわった人たちは、みな国家の富貴を貪る小人でございます。ささやかな功績を尽くし、血氣盛んで驕り高ぶり、節度がないことばかり行ないました。しかし英宗の復辟にかかわったということから、高い爵位や厚い俸禄や公や侯に封ぜられたりいたしました。その尊貴な地位を得た者は、奪門の變の功績を賞されたからであります。また厳しい法と刑罰が施行され、斬首刑や流刑となり、後に誅殺されることになった者は、驕り高ぶったことを罰せられたからであります。いま、国中に「先帝（英宗）は、自分を助け出したひとたちを罰することをお怒りになっている」という流言がなされております。ですが、こうしたことは万の一つもございません。信ずるに足るものではありません。陛下（憲宗成化帝）が即位なさった当初、罪深い邪悪なものたちは、恐れおののき肝をつぶしました。しかし、成化三年二月に陛下（憲宗成化帝）が商輅を再登用し、もとの職（兵部左侍郎太常寺卿兼翰林院学士）に復帰させ内閣で仕事をするようになったのを見て、喜んで自分ではしめたと思っております。また、皆はひそかに選抜任用されることを羨望して乞い求めています。かの小人も、官職を得たいと願っているだけです。どうして人にまで禍をあたえることができるのでしょうか。臣（黎淳）が思いますに、高瑤のこの提案は、郕王（景泰帝）を尊重することを求めるものではありません。ただ邪臣たちの拔擢のいとぐちとなるだけのものです。必ずこのことを操っている小人がおります。でなければ、かの草茅（民間）の者（高瑤を指す）が、宮廷とかけ離れていますのに、どうして妄言して先帝（英宗）が明察であったことを誣告して、後世の人たちがこの

ことを観るときの話しの種を作り出したのでしょうか。なのに、いまの議論する者たちは、またどうして察していないということがありますでしょうか。どうしてここに耐え忍んで自分の「高瑤の提言に反対するという」意志を曲げて高瑤の疏文の提出を認め、陛下（憲宗成化帝）のお耳を煩わそうとするのでしょうか」という。

この疏文が奏上されると、憲宗成化帝は、「景泰の過去の過ちについて、朕（憲宗成化帝）は、意に介したことはなかった。こうしたことを臣下が言うべきことであろうか。黎淳が高瑤批判の上奏を行なったのは、あきらかに媚び諂って、恩寵を願うことを求めるものである。高瑤の提案と黎淳の批判は、ともに聞きどけるものではない」という。

「黎淳の」疏 入り、上（憲宗成化帝）曰く、景泰の已往の過失は、朕 意に介さず。豈に臣下の當に言うべき所ならんや。〔黎淳が高瑤批判の上奏を行なったのは〕顯かに是れ獻諂（媚び諂う）希恩（恩寵を願う）なり²⁾。俱に必ずしも行なわず、と（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之四十九・「成化三年十二月庚子（八日）」条）。

黎淳は、廟號の追加（明朝歴代の皇帝を祭祀する廟（宗廟）に合祀する）を提案した高瑤をきびしく批判する。つまり、郕王（景泰帝）に廟號の追加すること（明朝歴代の皇帝を祭祀する廟（宗廟）に合祀）をみとめず、父の英宗が「郕王」に贈った諡の「戾」は、そのままにしておいたのである。しかも、憲宗成化帝は、「景泰の過去の過ちは、朕（憲宗成化帝）は、意に介したことはなかった」と述べ、黎淳の意見も自分に媚び諂うものともしている。ただ、「意に介したことはなかった」ならば、高瑤の廟號の追加（宗廟に祭祀する）の提案を認めてもよかったと思われるのだが。

2) 談遷の『國榷』では、黎淳の意見を節略し、最後に憲宗成化帝の発言を紹介して、以下のように述べる。

……上（憲宗成化帝）報じて曰く、景泰の已事（往事）は、朕 意に介せず。臣下 恩（恩寵）を希い、顯言（明言）し獻諂（媚びへつらい）す。俱に必ずしも行なわず、と。時に〔黎〕淳は長者（人格高潔で名声が高い人）なるも、郕王（景泰帝）の德を傷くと謂う（中華書局一九八八年第二次印刷・活字本『國榷』卷三十五・「憲宗成化三年十二月庚子」条・二二四三頁）。

時の人たちは、黎淳のこの発言は郕王（景泰帝）の德を傷つけるものだ、と理解したというのである。

なお、この条について、談遷は、つぎのようなコメントを付している。

談遷 曰く、昌邑王 既に廢され、未だ復して漢の某帝と爲すを聞かず。更始 既に廢され、未だ復して漢の某王と爲すを聞かず。景帝 豈に其の倫ならんや。社稷の功を論ずる無く、正位に即くこと七禩（年）にして、甚だしい失德無く、一の虚號を被る。安くんぞ其の溢るを見んや。黎太樸（黎淳：字は太樸）は、篤行の君子なり。〔なのに〕力めて高瑤を詆る。「必ず小人の之を指使す」と曰うに至るは、此れ何ぞ文の獄に異同（異なる）あらんや。獻諂（媚びへつらい）・希恩（恩寵を求める）なり。赫なるや明綸（憲宗成化帝の詔令）。〔臣〕子〔というものは〕其の面を蒙る（蒙面：厚顔無恥である）所無きを庶^{こいねが}う。「言行は、君子の樞機なり。愼まざる可けんや」^①（『國榷』卷三十五・「憲宗成化三年十二月庚子」条・二二四三頁）。

①『周易』繫辭上に「言行君子之樞機。樞機之發。榮辱之主也。言行。君子之所以動天地也。可不愼乎（言行は、君子の樞機なり。樞機の發は、榮辱の主なり。言行は、君子の天地を動かす所以なり。愼まざる可けんや）」。

付け加えておくと、ここで黎淳は、「今、^も若し誤りて高瑤の言を聴き、一に郕王に廟號を加えれば（いま、もしも高瑤の意見を誤ってお聞きになって、郕王（景泰帝）に廟號を加えられるのならば）」といい、「廟號を加える」具体的な作業としてつぎのようなことを行なわなければならないという。

それは、「必ず將に太廟に祭告（報告の祭祀を行なう）して舊制を改易して、祔廟（祖先の廟に合祀する）・承祧（廟の木主を繰り上げて遷す）の禮を行なわんとし、必ず將に梓宮を遷敞し山陵を改造し、珠襦玉匣（帝王の殮服）の典を加えんとし、必ず將に皇太后・皇后の稱を追贈せんとす。[そして]、必ず當に盡く當時の用いる所の人・行なう所の政を復すべしとす（郕王（景泰帝）に廟號を加えられるのならば、必ず太廟に祭告して制度を改め、祔廟（祖先の廟に合祀する）・承祧（皇帝廟の木主を繰り上げて遷す）の儀礼を行なわねばなりません、また、郕王（景泰帝）の梓宮を移して[皇帝の形式の]山陵を作り直し、珠襦玉匣（帝王の殮服）の儀式を加えねばなりません。郕王（景泰帝）の生母や妃に称号を追贈しなければなりません。そうして、必ず郕王（景泰帝）当時の人々や行われた政策を再評価しなければなりません）」というものであった。

ここからしても、「廟號を加える」として議論されているのは、郕王（景泰帝）を明朝歴代の皇帝を祭祀する廟（宗廟）に合祀することを認めるかどうかであったことが理解できるのではないだろうか。

では、なぜ高瑤の提案は、成化三年五月壬午（十八日）に提出され、禮部で議論が命ぜられたものの、その禮部の回答は、半年以上経過した成化三年十二月庚子（八日）に提出されたのであろうか。

それは、この年の八月に英宗「實錄」が奉られた時期と重なったことと関わりがあるのではないか。

そもそも「英宗皇帝實錄」は、天順八年（1464）一月庚午（十七日）に英宗が亡くなり、その七か月後の天順八年（1464）八月十七日に「實錄」編纂の勅諭が禮部に出される。

[天順八年八月] 戊戌（十七日）上（憲宗成化帝）禮部に勅諭して曰く、朕（憲宗成化帝）^{おも}惟うに古昔の帝王の功德の實は、諸々の簡冊に載せ以て後世に昭かにせざるは莫し。我が皇考英宗睿皇帝 聖哲の資・文武の德を持って、祖宗の大業を繼承すること、先後二十餘年なり。仁澤 四海に被り、功業 兩間（天地の間）^{あきら}に昭かなり。宜しく紀述すること有りて無窮を垂示すべし。爾ら禮部 宜しく祖宗の故事（舊例）^{したが}に遵いて、中外に通行（行文で通知する）し、事實を采輯し、翰林院に送りて、「實錄」を修纂すべし。其れ太保の會昌侯の孫繼宗を以て監修と為し、少保の吏部尚書兼華蓋殿大學士の李賢・吏部左侍郎兼翰林院學士の陳文・吏部右侍郎兼翰林院學士の彭時もて總裁と為し、禮部右侍郎の李紹・太常寺少卿兼翰林院侍讀學士の劉定之・南京國子監祭酒の吳節もて副總裁と為し、學士等^{など}の官の柯潛等^{など}もて纂修等の官と為し、所有める合行（まさに行なうべき）の事宜は悉く例

に照らして舉行せん。^{つし}欽め（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之八・「天順八年八月戊戌（十七日）」条）。

天順八年八月十七日、憲宗成化帝は、禮部に勅諭を出してつぎのように述べる。朕（憲宗成化帝）は思うに、古の帝王の功績や德行は、書物に記録し、後世にあきらかにした。わが父英宗睿皇帝は、聖哲の資・文武の德をお持ちになって、祖先の大業を継承されること前後二十年であった。仁澤は天下に及び、その功績は天地に明らかであった。その功績を記録して、無窮を示すべきである。禮部は、これまでの旧例にしたがって、中外に文書で通知して、史実を集め、翰林院に送って「實錄」を編纂せよ。太保の會昌侯の孫繼宗を監修とし、少保の吏部尚書華蓋殿大學士の李賢・吏部左侍郎兼翰林院學士の陳文・吏部右侍郎兼翰林院學士の彭時を總裁とし、禮部右侍郎の李紹・太常寺少卿兼翰林院侍讀學士の劉定之・南京國子監祭酒の吳節を副總裁とし、學士の柯潛などを纂修などの官とせよ。すべての行なうべき作業は、ことごとくこれまでの例にしたがって行え、という。

そうして、三年をかけて編纂作業を終えた「英宗皇帝實錄」は、成化三年（1467）八月十六日に禮部から奉られる。

〔成化三年八月〕己酉（十六日）、禮部「英宗睿皇帝實錄」を^{たてま}上つり進む……（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之四十五・「成化三年八月己酉（十六日）」条）。

つまり、高瑤の提案がなされた成化三年五月十八日には、編纂作業がほとんど完成していたと考えられる。

「英宗睿皇帝實錄」編纂されていたこの時点では、宣宗宣德帝の皇后で英宗の生母の孫太后の諭（懿旨）によって皇帝の地位から降格されて「郕王」とされたことと、英宗の贈った「戾」の諡について、まったく変更がなかったことから、郕王（景泰帝）の景泰年間の事績は、「英宗皇帝實錄」卷之一百八十三から卷二百七十三に「廢帝郕戾王附錄」として記載される³⁾。

その取り扱いは、「修纂凡例」によるとつぎのようなものであった。

- 一 景泰年間の事を附録するに、其の稱號・行欵（書法）は、悉く天順年間に據る。各司の奏牘の内に引く所の景泰〔年〕間の欽依（皇上の裁可）等の項の事例は提起して高書す（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』「修纂凡例」）。

景泰年間の事を附録するのに、その中の称号や書法は、天順年間の用例に準拠する。それぞれの役所からの文書に引用される景泰帝の言葉の引用などの項目の「上」字は、抬頭にする（中央研究院歷史語言研究所が影印刊行した舊國立北平圖書館藏紅格抄本「英宗實錄」は、抬頭ではなく一字空格になっている）。景泰年間の記述では、景泰帝を皇帝として記述するというのである。

ただし、八月二十四日に提出された孫繼宗などの「實錄表」によると、

……恭しく惟うに皇帝陛下（憲宗成化帝）……^{はじ}甫め諒陰（喪中）に在りて「實錄」修

- 3) 現在、よく利用される中央研究院歴史語言研究所が影印刊行した舊國立北平圖書館藏紅格抄本「英宗實錄」の卷一百八十三から卷二百七十三までは「廢帝郕戾王附錄第一」から「廢帝郕戾王附錄第九十一」と記される。

また、萬曆十六年（一五八八）二月丁丑（二十四日）に、國子監司業の王祖嫡（字は胤昌，号は師竹・四部堂・師竹堂・師竹山房。河南信陽衛（山東德州）の人。嘉靖十年（一五三一）～萬曆十九年（一五九一）？：六十歳で没。隆慶五年辛未科（一五七一）三甲二百十名の進士）が、

缺典を修め、以て繼述（繼承）を隆（とうと）ばんと奏し、建文の革除は未だ復せず・景泰の附錄は未だ正さざるなりと謂う（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之一百九十五・「萬曆十六年二月丁丑（二十四日）」条：明抄本『萬曆起居注』にはこの条なし）。

と上奏した。建文帝の年号の復活と、単独で景泰帝の「實錄」を作成することを求めたのである。

この王祖嫡の「建文の年號を復し、景皇帝（景泰帝）實錄を改正する」提案について、申時行（字は汝默，号は瑤泉・賜間堂・休休居士・蘇庵主人・蘇齋。江蘇長洲の人。嘉靖十四年（一五三五）～萬曆四十二年（一六一四）。嘉靖四十一年壬戌科（一五六二）一甲一名の進士）は、つぎのように述べる。

〔萬曆十六年三月〕壬辰（十日），大學士の申時行 奏すらく、禮部覆司業の王祖嫡

「建文の年號を復し、景皇帝（景泰帝）實錄を改正する」を請う。竊かに惟うに・・・英宗「實錄」は、成化初年に修めらる。景皇帝（景泰帝）の未だ位號を復さざるの先に在り、故に仍お「郕戾王」と稱し、景泰の七年〔間〕の事は遂に「英宗實錄」の内に附す。部覆（關係部局の提案）極めて詳明と為す。〔明抄本『萬曆起居注』に「其の年を復し、「實錄」を改正するを請うは、亦た正當と為す」と有り〕第だ事體は重大なり。年歲 久遠なれば、更定せんと欲するが如し。〔しかし、それは〕須らく聖裁よりすべし。今、景皇帝の位號は已に復すれば、實錄の内の改正に過ぎず。其の理順い、事は亦た易し。惟だ建文の年號は靖難より以來、未だ位號を復し、實錄を修むるを請う者有らず。事繇（事態）は創舉（はじめて）なれば、未だ會議を経ず。臣等 擅（ほしいまま）に定擬し難し。伏して聖斷を乞いて施行せん、と。上諭ありて景皇帝の位號は已に復すれば、實錄は纂修改正を候て。建文の年號は仍お之を已めよ（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之一百九十六・「萬曆十六年三月壬辰（十日）」条：明抄本『萬曆起居注』はば同じ）。

英宗「實錄」は、成化の初めに成っていて、景皇帝（景泰帝）の帝位の復活が決定する前であった。だから「郕戾王」と書き、景泰の七年間の事柄は、英宗「實錄」の内に附されている。關係部局の提案も詳細をきわめている。ただし、提案は重大なことにかかっている。年月が久しく過ぎているので、改めてもらいたいと思う。しかし、それは陛下ご自身でご判断されるべきである。いま、景皇帝（景泰帝）の帝位は復活させているのだから、「實錄」を改正するにすぎない。これは、道理にかなっており、事は容易である。ただし建文帝の年号については、永樂帝の時より、建文帝の帝位を復活させ、「實錄」を編纂してほしいと願ひ出るものすらいない。これは始めての提案であるので、これまで検討されたことはない。また私たち臣下が勝手に原案を提出することすら困難である。伏して陛下のご聖斷をお待ちして施行したいと思っている、という。その結果、景皇帝（景泰帝）の帝位はすでに復活させているので、「實錄」は、纂修改正を待って行なえ。「建文」の年號については、用いないままにしておけ、という。

ここからすると、萬曆以降には、英宗「實錄」の「廢帝郕戾王」という記載は変更されたかのようである。しかし、『明英宗實錄校勘記』巻首の「明英宗實錄校勘記引據各本目錄」「三 北京大學本」条に、この申時行の上奏文を引用して、つぎのようにいう。

此れ「改修」と云うと雖も、然れども「起居注」に「萬曆十八年、申時行の進む所の小型本」と記す「英宗實錄」と「實錄」に「二十六年八月、趙志皐の進む所の本」と記す「英宗實錄」とは、均しく三百六十一卷に作る。則ち所謂ゆる「纂修改正」は、疑うらくは亦た未だ之を實行せざるなり。〔この〕北大本（北京大學本）に「景皇帝實錄」を作るは、殆ど〔この〕上諭有るを以て、民間 遂に私に改むるのみ（『明英宗實錄校勘記』巻首「明英宗實錄校勘記引據各本目錄」「三 北京大學本」条・二業）。

すると、明朝を終えるまで、依然として「廢帝郕戾王」と記されていたのではないだろうか。

むるを命じ、臣〔孫〕繼宗等に勅す。金匱石室（文書館）の秘載（秘められた記録）^{かんが}を稽え、青瑣（宮廷）・黃門（宮中）の封章（密封して天子の奉られた書）を彙め、^{あつ}参^{まじ}えるに京都の百署の陳ぶる所を以てし、^{あきらかに}證するに寶宇（天下）九域（九州）の報ずる所を以てし、^①研精覃思すること千百餘日にして其の事^{おわ}完れり。首より尾に至る三十多年、其の蹟^{そな}具われり。君上（君主）の言動（言行）を書するに其の要を得、臣下の善惡を斷ずるに其の公を以てす。景泰を付するに至りて以て先帝（英宗）の居常（平時）・處變（非常事態）の道有るを見^{しめ}す。寶訓を集め以て先帝の貽謀（訓戒）・垂統（皇位の継承）の規有るを彰かにす。豈れ惟だ聖裁を仰ぎ稟くるのみ。抑且（そのうえ）悉く舊制に遵い、恭しく「英宗睿皇帝實錄」三百六十一卷・寶訓十二卷、合せて目錄・凡例三百七十五冊を成し、謹みて繕寫して上進す……（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之四十五・「成化三年八月丁巳（二十四日）」条）。

①『尚書』孔安國序に「於是遂研精覃思，博考經籍，采摭群言，以立訓傳（是に於いて遂に研精覃思し，博く經籍を考え，群言を采摭し，以て訓傳を立つ）」。

皇帝陛下（憲宗成化帝）が喪中でいらっしゃった時、英宗「實錄」の編纂を命じて詔をお出しになった。宮廷の文書館の機密文書を調べ、宮中で提出された上奏文を集め、都の役所で議論されたことを交え、天下に告示されたことを考え、千百餘日にわたって深く検討して編纂事業は完了した。先帝（英宗）の治世の最初から最後に至る三十年あまりの事績をすべて記載した。君主の言行を記載するのにその要領を得、臣下の善惡を判断はその公私をもってした。景泰年間のことを附録するについては、先帝（英宗）の平時や非常事態で分別（道）をお持ちであったことを示した。また、先帝（英宗）の寶訓を集めて、その訓戒や王位継承の正統性をはっきりさせた。あとは皇帝陛下（憲宗成化帝）の裁可をうけるのみである。そして、すべて通例のように「英宗睿皇帝實錄」三百六十一卷・「寶訓」十二卷、合せて目錄・凡例三百七十五冊を筆写して提出いたします、という。

景泰年間のことは、英宗の立場から、英宗が理性的に振舞っていたことを記す。景泰年間の郕王（景泰帝）のことは、抬頭して記載し皇帝の体裁をとるものの、あくまでも附録として掲載する、という方針であったようだ。

高瑤の提案は、この「英宗睿皇帝實錄」が進呈される成化三年（1467）八月十六日の直前に提出される。当時、景泰帝の帝號は取り消され、景泰帝は「郕王」と称されていた。しかも、郕王（景泰帝）を「廢帝郕戾王附錄」として取り扱っている「英宗睿皇帝實錄」の進呈も間近であった。議論を命ぜられた禮部としても、こうした事情を考慮して検討結果の提出を遅くしたのかもしれない。

さて、高瑤・黎淳などの議論から三年後の成化六年八月乙卯（十日）に巡按直隸監察御史の楊守隨（字は維貞，号は貞菴・文湖。浙江鄞縣の人。？～正徳十五年（一五二〇）。成化二年丙戌科（一四六六）の三甲一百一名の進士）が五つの提案を行なう。その第一に、英宗が郕王

に贈った「戾」の諡を再考していただきたいというものがあつた。

〔巡按直隸監察御史の楊守隨 五事を言う〕其の一は諡法を明らかにす。郕王（景泰帝）薨逝し、之に諡して「戾」と曰う。戾とは罪あるなり、乖るなり。諡法に在りては「前過を悔いず（不悔前過）」と為す。郕王（景泰帝）英宗の北狩の時に當りて、奉^うけたる命もて監國し、宗社の計を以て已むを得ずして即位し、北のかた戎狄を悍（抗拒）し、南のかた閩を平らげ、廣く人心の將に變ぜんとするを定め、國勢の阡危（危機に瀕する）を安んず。其の社稷に功有ること甚だ大なり。虜を威^{おど}すに甲兵を以てし、虜に陷^{おろ}わすに金幣を以てし、大駕を迎回し、之を南宮に尊養（尊んで扶養する）す。賊臣に離間（兄 英宗と仲たがい）を為^なさせず。其れ兄弟の情 甚だ厚し。大臣を任信し、忠諫（忠心のこもった諫言）を聽納（善言を聞き入れ採用する）し、興學して士に加惠（恩恵を施す）し・恤民（困苦を憂慮）を勸む。其の善政の天下に在るや甚だ夥^{おほ}し。末年に少し過愆^{あやまち}有りて雖も、豈に一つの咎^{あやまち}を以て、而して衆善を掩^{おほ}う可けんや。況んや惡諡は先帝（英宗）の本意に出るに非ず、乃ち一二の造孽（もめ事を起こす）もて倖功（功績をあげる僥倖を願う）するの奸臣の邪議の今に至るをや。公論 之が為に平らかならず。古の諡を定むる者は、苟し一つの善有れば以一つの善諡を以てし、兼ねて衆善有れば、節するに一惠を以てす。惟だ善の稱す可きもの無ければ、方に惡諡を得。近時、大臣 奸回（邪惡でよこしま）貪墨（汚職する）なる者有るも、尚お美諡^{むさぼ}を濫^{みだ}れり。豈に陛下（憲宗成化帝）の至親〔の景泰帝〕を以て乃ち其の善^{みだ}を泯^{みだ}し、而して久しく惡諡を蒙らしむ可けんや。乞う廷臣に勅して會議せしめ、其の善行を取りて、改めて之に諡すれば、則ち公道（公正な道理）昭明なり。諡法允當（正しく理にかなう）なりて、而して陛下（憲宗成化帝）の親親（親族を大切にする）の令名（高い名声）も亦た窮まる無し……（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』 卷之八十二・「成化六年八月乙卯（十日）」条）。

①『左傳』僖公三十三年に「且吾不以一眚掩大德（且つ吾 一眚を以て大德を掩わず）」。

郕王（景泰帝）がお亡くなりになり、「戾」と諡されました。「戾」とは、罪があるとか、乖（そむく・邪惡）の意味です。「諡法」では、「前過を悔い改めない」としております。そもそも、郕王（景泰帝）は、正統十四年の土木の變で、先帝（英宗）は北に行ってしまった時に、命ぜられて監國となり、国家の大計のためにやむをえず帝位につき、北方の異民族を防禦し、南方では閩を平定して、人々の気持ちが混乱するのを定め、国家の危難を安定させました。国家に功績があること、きわめて大きいものがございます。さらに虜を武力で威圧したり、虜に金品をあたえたりすることで、先帝（英宗）を帰還させ、宮中の南宮で尊んで扶養なさいました。賊臣に先帝（英宗）と仲たがいさせる機会もあたえさせませんでした。兄弟の情はきわめて深いものです。大臣を信任し、忠心のこもった諫言をよく聞き入れ、學問をさかんにし、読書人を優遇し、人々の困苦を憂慮されました。その天下に行われた善政は、はなはだ多くございました。治世の末期には、少しばかり過ちがございましたが、ひとつの過失をもってすべての善

いことを覆い隠すべきでしょうか。ましてや悪い諡は先帝（英宗）の本意ではなく、一二のめ事を起こして功績をあげる僥倖を願っている奸臣の邪議によっているのですから。しかしながら、公論はこのために公正ではありません。むかしの諡を定めた人は、もしもひとつの善いことがありましたら、ひとつの善い諡を贈ります。おおくの善いことを持っているようでしたら、要約してひとつを贈呈します。ただ善行とよべるものがなければ、悪い諡をあたえます。近頃は、大臣で邪悪で汚職するような者がいても、またすばらしい諡を切望します。いったい陛下（憲宗成化帝）の近親である郕王（景泰帝）を、その善行を混乱させ、久しく悪い諡をあたたままにしておくべきでしょうか。廷臣に詔をお出しになって、会議させて郕王（景泰帝）の善行を検討して、改めて諡をお贈りになることを願います。そうすれば、公正な道理が明らかとなり、諡法も正しく理にかなって、陛下（憲宗成化帝）のご親族を大切になさるという高い名声も極まることのないことでしょう、という。

郕王（景泰帝）が皇帝であった終わりころには、すこしばかりの過ちがあったものの、善政が多かった。そこで、英宗が郕王に贈った「戾」という諡を再考すべきではないかという提案である。

ただ、郕王に贈られた「戾」字は、父親の英宗の取り決めた諡である。変更するとなると、「不孝」の汚名を被ることにもなりかねない。憲宗成化帝は、このことはすでに方針が決定していることであるとして、その上奏文を担当官に届けさせただけであった。

疏 入り、上（憲宗成化帝）言う所の事は俱に處分（つみつけ）已に定まるを以て、其の章を所司に下す（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之八十二・「成化六年八月乙卯（十日）」条）。

この後、「實錄」を見る限りでは、臣下からは郕王（景泰帝）の廟號の復活や諡號の変更についての提案はなかった。

ところが、楊守隨の提案の五年後の成化十一年十二月戊子（十三日）になって、突然憲宗成化帝から、郕王（景泰帝）の帝號を復活し・尊號を贈り（皇帝であったことは認めるが、明朝歴代皇帝の宗廟で祭祀しない）、その陵墓の手直しすることについて会議して意見を提出するよう詔が出る。どうしてか。つづけて検討してみたい。

（二）

これまで郕王（景泰帝）の廟號の追加（郕王（景泰帝）を明朝歴代皇帝の廟（宗廟）で祭祀すること）や諡についての提案がなされても、すべて憲宗成化帝は認めてこなかった。なのに、なぜこの時期に憲宗成化帝から帝號を復活し、尊號を贈り（皇帝であったことは認めるが、明朝歴代皇帝の宗廟で祭祀しない）、陵寢（陵墓）の改装の命令が出されたのか。

これは、あくまでも推測にすぎないが、帝號復活の命令が出される前月の十一月癸丑（八日）

に、第三子の祐樞（後の孝宗弘治帝）が皇太子となったことと関わりがあるのではないだろうか。

そもそも憲宗成化帝の皇子は、以下の十四人いた（第一子と第十子は、命名する前に亡くなる）。

- 第一子 成化二年一月十九日生：同年二年十一月二十六日薨
- 第二子 祐極 成化五年四月二十八日生（『弇山堂別集』卷三十一・東宮紀・「悼恭皇太子祐極」条による）：成化八年一月二十六日薨
- 第三子 祐樞 成化六年七月三日生
- 第四子 祐杭（睿宗獻皇帝）成化十二年七月二日生
- 第五子 祐楡（『明史』作「楡」）成化十四年十月十八日生
- 第六子 祐楨 成化十五年一月四日生
- 第七子 祐樞 成化十五年閏十月二十五日生
- 第八子 祐樞 成化十七年六月三日生
- 第九子 祐樞 成化十七年十一月十二日生
- 第十子 成化十九年七月十七日生：同年九月七日薨
- 第十一子 祐楨 成化二十年九月二十四日生
- 第十二子 祐樞 成化二十一年三月十六日生
- 第十三子 祐樞 成化二十一年十二月十七日生
- 第十四子 祐樞 成化二十三年一月十日生

第一子は、成化二年一月十九日に生まれ、十一月二十六日に亡くなる（憲宗成化帝の寵妃の萬氏の出。以後、萬氏との間には皇子は生まれていない）。また、第二子の祐極は、成化五年四月二十八日に生まれ、成化七年十一月十六日に三歳で皇太子に冊立されるが、成化八年一月二十六日に亡くなる。

第三子の祐樞（後の孝宗弘治帝）は成化六年七月三日に生まれている。第四子の祐杭は、成化十二年七月二日に生まれているので、第三子の祐樞（孝宗弘治帝）が皇太子に冊立された成化十一年十一月時点では、この祐極（孝宗弘治帝）しか皇子はいなかった。

第二子の祐極が皇太子に冊立されると、すぐに彗星が現われ、その対応に追われているうちに第二子の祐極は亡くなる。その後、改めてひとりしかいない皇子を皇太子に冊立する。第二子の祐極のことがあるので、皇太子のすこやかな成長を願って、父の憲宗成化帝は、人々に恩寵を与えていった。その締めくくりに、郕王（景泰帝）の帝號の復活が命ぜられたと考えることはできないだろうか。

では、第二子の祐極と第三子の祐樞（孝宗弘治帝）の時には、どのようなことがあったのか。

第二子の祐極が成化七年十一月十六日皇太子に冊立され、大赦が行なわれた。ただ、翌月十二月七日に彗星があらわれ、憲宗成化帝は詔を下して自責（みずからの過ちを責める）する。臣下からもしきりに治世に対する提言がなされる。この星變は、特別視されたようで、正殿（奉天殿）での儀式を奉天門に変更するようなことも行われる⁴⁾。ようやく、成化八年春正月九日に「夜、彗星 奎宿の外屏を行く、星の下の方 漸く消え、小となる」となるが、正月二十六日に祐極は亡くなってしまう⁵⁾。

この時、憲宗成化帝の寵妃の萬氏を憚って第三皇子の祐樞（孝宗弘治帝）の存在は公にされなかったようである。そうした事情を黃瑜（字は廷美、廣東香山（今の廣東中山市）の人。宣德元年（一四二六）～弘治十年（一四九七）景泰七年（1456）の舉人）の『雙槐歲鈔』は、つぎのように伝える。

萬貴妃 始めは宮人と爲りて、東駕盤櫛を司どる。諂智（悪賢い智謀）もて善く媚ぶ。既にして寵を顛^{もつぱら}にす。昭德宮に居り、太監の段英 其の宮事（宮中の事務）を掌り、其の兄弟子姪の萬通・萬喜・萬達^①の輩と戚福 赫奕（顯赫）たり。大學士の萬安 [姓が萬ということから] 同族爲りと認められ、劉吉と皆な之に附す。朝士の無恥希進する者、其の門に群趨（趨）す……己丑（成化五年：1469年）九月、[憲宗成化帝は] 昭德宮に幸す。時に皇妣（亡母に対する敬稱：この場合は孝宗弘治帝の生母の紀氏）の紀氏 御妻^②（女官の名称）の列に在り。既にして娠む有り。[權勢を極めていた] 萬氏 之を知りて、百方（いろいろな方法）もて苦楚（苦しませる）するも、胎 竟に墮せず。上（憲宗成化帝）命じて安樂堂に出居させ、托言（假稱）して痞（腹中に塊ができる病気）を病むとす。庚寅（成化六年：1470年）七月己卯朏（三日）、今の聖上皇帝^{うま} 誕る。皇妣（生母の紀氏）乳少なく、太監の張 女侍（侍女）をして粉餌（米粉で作った食品）を以て之を哺（はぐく）むこと彌月（一ヶ月にわたる）なり。西内の廢后吳氏 保抱（撫養）惟れ謹む（こまかに気を配る）。未だ奉命せざるを以て、敢えて胎髪を剪剃せず。辛卯（成化七年：1471年）

4) 憲宗「實錄」には、

[成化七年十二月] 壬午望（望：十五日）、上（憲宗成化帝）星變を以て正殿（奉天殿）を避け、樂を撤（撤去）し、奉天門に御し常朝の儀の如くす（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之九十九・「成化七年十二月壬午望（十五日）」条）。

とあり、清・夏燮（字は謙父。安徽當塗の人。嘉靖五年〔一八〇〇〕～光緒元年〔一八七五〕）の『明通鑑』（清・同治十二年（一八七三）宜黃刊本）は、

上（憲宗成化帝）正殿（奉天殿）を避け、樂を撤（撤去）し、奉天門に御し政を聽く（『明通鑑』卷三十二・紀三十二・「[成化七年十二月] 壬午、上避正殿徹樂御奉天門聽政」条「攷異」・八葉）。

とし、「攷異」で、

[攷異]『明史』本紀は、日食の外、星變は多く書せず。是の年の十二月に彗^{あら} 見われれば、則ち之を書す。以て正殿を避け、樂を撤（撤去）するは、常に非ずと爲すなり……（『明通鑑』卷三十二・紀三十二・「[成化七年十二月] 壬午、上避正殿徹樂御奉天門聽政」条「攷異」・八葉）。

という。

- 5) 彗星への対応は、憲宗「實錄」(『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之九十八～卷之一百)によると以下のようになる。

成化七年十一月

○甲寅(十六日)、第二子の祐極(成化五年四月二十八日生)が皇太子になり、大赦が行なわれる。

成化七年十二月

○甲戌(七日)彗星があらわれ、文武の羣臣に勅諭が出される。

〔甲戌(七日)、文武の羣臣に勅諭して曰く、乃者^{さきころ} 彗 天田に見われ、光芒 西指す。玄象(天象)を仰ぎ観て^{つし}祇み懼る。實に深く俯して自から省修(反省して身を修める)するも厥の咎を知る罔し。豈に朕 涉道(皇帝としての旅立ち)尚お浅く、燭理(事理を考察する能力)未だ明かならずして刑政の善からざるためか。抑そも人を用いること未だ^{こころ}嘗みざる有りて、賢否 混淆するためか、聽言 察せざる有りて是非 乖舛するためか、用度(費用)奢侈にして、賞賜 節無きを將つて、妄りに府庫の財を費やすためか、營繕(修繕)頻煩(頻繁)にして、徴科(徴税)藝(基準)無く、軍民の心を傷ましむを致すためか。此に一(ひとつでも)有れば、悉く朕(憲宗成化帝)の過ちなり。而して爾ら文武の羣臣 皆な居官(官員となり)食祿(俸給を受ける)し以て朕(憲宗成化帝)を輔[佐]する者なり、痛みて自から修省(身を修めて反省する)せざる可けんや。其れ公に背きて私に従いて政事を怠廢する者有れば、宜しく速やかに改勵(改過ちを改める)し以て庶政(各種の政務)を修め以て朕(憲宗成化帝)の逮ばざるを匡すべし。凡そ時政の得失・生民の利病に張弛(締めたり緩めたり)・興革(始めたり改めたり)す可き者有れば、爾ら文武大臣并せて科道 公同に會議し停當(処理する)し條舉して以て聞せよ。務は切實に行なう可きに在り。庶幾わくは君臣上下 心を同じく德に協い交修の道を盡せば、則ち人心悦び、而して天意回らんことを(『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之九十九・「成化七年十二月甲戌(七日)」条)〕。

①『舊唐書』代宗紀に「朕涉道未弘、燭理多昧(朕 涉道未だ弘からず、燭理 味きこと多し)」。

②『書經』説命下に「爾交修予、罔予棄、予惟克邁乃訓(爾 交ごも予を修めよ、予を予棄つこと罔れ、予 惟れ克く乃の訓を邁わん)」。

○庚辰(十三日)、太子少保吏部尚書兼文閣大學士の彭時など「正心術」など七箇条を提言する。

〔奏入り、上(憲宗成化帝)曰く、具さに言う所の事を覽るに、皆な切實なり。朕(憲宗成化帝)自から處置せん。卿等 宜しく勉力(盡力する)佐理(補佐する)し、以て朕が懷に副うべし(『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之九十九・「成化七年十二月庚辰(十三日)」条)〕。

○辛巳(十四日)、文武大臣・六科十三道・英國公の張懋・太子少保兼吏部尚書の姚夔などが「星象 變を示し、伏して聖諭命を聽き、時政を條舉し以て聞す」として二十五箇条の提案を行なう。

〔上(憲宗成化帝)曰く、卿等の言う所、皆な時弊に切なり。内に在る[提言の]者は、……[いくつかに指示を出し]……、其の餘は所司 即ち之を舉行(施行)せよ(『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之九十九・「成化七年十二月辛巳(十四日)」条)〕。

○辛巳(十四日)、光祿寺少卿の陳鉞が星變に因りて時弊五事を上言する。

〔上(憲宗成化帝)所司に命じて之を省せしむ(『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之九十九・「成化七年十二月辛巳(十四日)」条)〕。

○壬午(十五日)、上(憲宗成化帝)星變を以て正殿(奉天殿)を避け、樂を撤(撤去)し、奉天門に御し常朝の儀の如くす。

○壬午(十五日)、都察院左都御史の李賁が星變のため辭職を願ひ出るが、認められない。

○癸未(十六日)、太子少保吏部尚書兼文淵閣大學士の彭時などが、星變のため召見を願ひ出る。

○癸未(十六日)、兵科給事中の郭鐙が提言する。

〔上(憲宗成化帝)以らく[郭]鐙の言う所は多く文武大臣の會議の具奏する者なり。[なのに]、今又た妄りに煩瀆(輕率にかき乱す)を言え、本より當に逮問(逮捕して罪を問う)すべきも、姑く之を恕す(『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之九十九・「成化七年十二月癸未(十六日)」条)〕。

十一月、悼恭太子祐極 東宮に正位（正式に登位する）し、已にして痘に薨ず。禁中 漸く西宮に一皇子有りと傳う。上（憲宗成化帝）心に甚だ之を念う。然れども萬氏の忌む所と爲るを慮る。乙未（成化十一年：1475年）五月、張敏 段英に厚結（親交を深める）し、萬氏の喜びし時に乗じて進言す。萬氏 之を許し、上（憲宗成化帝）即ち召見す。髪 已に額を覆う。天性 感通し、相い持して泣き下り動容（表情を変え感激する）す。出語矩度 不凡なり。上（憲宗成化帝）之を撫して大いに喜ぶ。萬氏 具服（朝服）もて進賀（禮物を進獻して慶祝を示す）す。遂に内閣をして名を擬（擬定）すること至再なり。[最後には]、上（憲宗成化帝）親から之に名づけ、仁壽宮に送り撫育せしむ。中外 之を聞き^み膏な悦ぶ。皇妣（生母の紀氏）萬氏の觴^{さかずき}を受け、疾有り。西内の永壽宮に徙居す。[成化十一年] 六月戊寅朔、文武の大臣 元良（太子）を建てんことを請い、甲申（七日）に奏上す。皇子の稍や長ずるを待ちて之を行なうを命ず。是の月（成化十一年六月）の乙巳（二十八日）、皇妣（紀氏）薨ず。淑妃に追封す。京師 藉藉（口々に騒ぎ立てる）たりて、鳩に薨ずと謂う。[成化十一年] 十一月、始めて今上（孝宗弘治帝）を立てて皇太子と爲す。大寶に登るに及び、皇妣（生母の紀氏）を追尊し、諡して「孝穆皇太后」と曰う……（嘉

◎己丑（二十二日）、工科給事中の張琳が提言する。

〔疏入り、上（憲宗成化帝）曰く、言事の當理（理に合う）者、朕 未だ嘗て従わざるにあらず。當に理ならざる者有るも亦た罪を加えず。〔張〕琳 如何ぞ又た是の言を為さん（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之九十九・「成化七年十二月己丑（二十二日）」条〕〕。

◎庚寅（二十三日）、左春坊左諭徳の王一夔が五箇条の提言を行なう。

〔批答に曰く、此れ皆な陳腐の言にして、而して妄りに自から大本（原因）を張（誇張）すれば、當に究治（追究して處理する）すべし、但だ係れ言を用いるの時なれば、姑く之を宥^{ゆる}す（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之九十九・「成化七年十二月庚寅（二十三日）」条〕〕。

◎庚寅（二十三日）、刑科等科都給事中の白昂などが十二箇条の提言を行なう。

〔奏入り、其の議に従う。惟だ「黜陟大臣」・「召還鎮守」・「點閤三營」・「取回官店」の四事は俱に命じて之を已む（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之九十九・「成化七年十二月庚寅（二十三日）」条〕〕。

成化八年正月

◎戊戌朔（一日）、星變のため慶賀の禮を取りやめる。

◎戊戌朔（一日）、十三道監察御史の張敷などが星變のために八箇条を陳言する。

〔上（憲宗成化帝）批答して曰く、爾等の言〔のうち〕是れ自から〔官員が星變のため〕退避（辭職）するを陳ぶの一事は已に處置す。餘は皆な准行（実行を許す）す（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之一百・「成化八年春正月戊戌朔」条〕〕。

◎乙巳（八日）、太子少保兼吏部尚書の姚夔が星變のため稱疾して辭職を願ひ出るが、認められない。

〔上（憲宗成化帝）曰く、玄象 警を君臣に示せば、正當^{まさあた}に同じく修省（反省して身を修める）を加え、以て天變に應ずべし。卿は大臣^{たいじん}爲り。何ぞ輒ち退避（辭職）を求めん。辭する所は允さず（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之一百・「成化八年春正月乙巳（八日）」条〕〕。

◎丙午（九日）、夜、彗星 奎宿の外屏を行く、星の下の形 漸く消え、小となる。

◎辛亥（十四日）、星變のため慶成宴（天地を大祀した翌日に舉行される宴：『大明會典』卷之二百十五・太常寺による）をとりやめる。なお、この年の天地の大祀は、丁未（十日）に行われている。

◎癸亥（二十六日）、皇太子祐極が亡くなる。

靖三十八年（一五五九）陸延枝刻本『雙槐歲鈔』卷第十・「孝穆誕聖」条・一葉～二葉：『四庫全書存目』子部二百三十九冊所収）。⁶⁾

①威福：『書經』洪範に「惟辟作福，惟辟作威（惟れ辟 福を作し，惟れ辟 威を作す）。

②御妻：『禮記』昏義に「古者天子后立六宮，三夫人・九嬪・二十七世婦・八十一御妻，聽天下之內治，以明章婦順（古者は天子の後 六宮を立つ，三夫人・九嬪・二十七世婦・八十一御妻，以て天下の内治

- 6) 黄雲眉の『明史考證』は、『雙槐歲鈔』と『治世餘聞錄』とを引用し，つぎのようにいう。

此れ（『雙槐歲鈔』・『治世餘聞錄』）に據れば，則ち成化十一年の召見の前に，帝（憲宗成化帝）已に西宮に子有るを知る。且つ先ず張敏の段英に結ぶに由りて萬貴妃に進言し，而して後に召見を得る者なり。兩書（『雙槐歲鈔』・『治世餘聞錄』）の記載 皆な同じなれば，史（『明史』）に較べて實に近しと爲すに似たり（中華書局一九八五年刊『明史考證』第四冊・九八二頁～九八三頁・明史卷一百十三（列傳第一）考證・后妃一・孝穆紀太后・「成化十一年，帝召張敏櫛髮，照鏡歎曰：“老將至而無子。”至萬貴妃日夜怨泣曰：“羣小給我。”」条）。

なお，『治世餘聞錄』（上篇卷之一：明萬曆四十五年陳于廷刻『紀錄彙編』卷八十三～卷九十所収本）に，「詳しくは大學士尹直の『〔審齋〕瑣綴錄』に見ゆ」とあるように，『審齋瑣綴錄』卷之五・（『四庫全書存目』子部二百三十九冊所収「明鈔『國朝典故』本」）には，いますこし詳しく記載される。ただし，徐乾學（字は原一，号は健庵。江蘇崑山の人。明・崇禎四年（一六三一）～清・康熙三十三年（一六九四）。康熙九年庚戌科（一六七〇）一甲三名の進士）の「修史條議」によると，『〔審齋〕瑣綴錄』は，

野史の流傳するものは，盡くは信ず可からず。其の最も私を挟みて正を害する者は，尹直の『瑣綴錄』・王瓊の『雙谿雜志』・支大綸の『永昭陵編年史』に如くは無し。此れ皆な小人の尤にして，其の言 豈に憑據するに足らんや……（『憺園集』卷第十四・「修史條議」・十九葉）。

といわれる。

また後になると，この説話が發展して，最終的にはつぎのような『明史藁』・『明史』の記述となり定着する。

孝穆紀太后は，孝宗の生母なり。賀縣の人にして，本と蠻土の官女なり。成化中に蠻を征ちて，俘として掖庭（後宮）に入り，女史を授けらる。警敏にして文に通じ，命じて内藏（後宮の倉庫）を守らしむ。時に萬貴妃 寵を顯にし妬（他の女性との仲をにくむ）あり，後宮に娠（みごもる）者有れば，皆な治（治療）して墮（胎）せしむ。柏賢妃〔第二子の〕悼恭太子を生み，亦た害する所と爲る。帝（憲宗成化帝）偶々内藏を行くに，應對稱旨（憲宗成化帝の気持ちに合った）す。〔それで〕，之を悦び一幸ありて。身（みごもる）有り。萬貴妃 知りて悲ること甚だし。婢をして之を鈎治（詳しく調べて処置する）せしむ。婢 謬き報じて「痞（腹中に塊ができる病氣）を病む」と曰う。乃ち謫めて安樂堂に居す。久之，孝宗を生めば，門監の張敏をして溺れしむ。〔張〕敏 驚きて曰く「上（憲宗成化帝）未だ子有らず。奈何ぞ之を棄てんや」と。稍づつ粉餌（米粉で作った食品）・飴蜜を哺まし，之を他室に藏す。〔萬〕貴妃 日々伺うも得る所無し。五六歳に至り，未だ敢て胎髮を剪らず。當時，吳后 廢されて西内に居（すまい）し，安樂堂に近し。密かに其の事を知り，往來して哺養するも，帝（憲宗成化帝）知らざるなり。帝（憲宗成化帝）〔第二子の〕悼恭太子の薨じてより，數數影の躑躅（うろろうする）するを視る。中外の羣臣 皆な〔萬〕貴妃の故さらに恐るるを以て皇嗣は復た望む可からざるを知り，私に帝に爲に憂う。成化十一年，帝（憲宗成化帝）一日〔張〕敏を召して櫛髮させ，鏡を照らし嘆きて曰く，「老の將に至らんとして子無し」と。〔張〕敏 地に伏して曰く，「死罪あり。萬歲（憲宗成化帝）已に子有るなり」と。帝（憲宗成化帝）愕然とし，「安くに在りや」と問う。對えて曰く「奴 言いて即ち死せん。萬歲（憲宗成化帝）當に子の主と爲るべし」と。是に於いて太監の懷恩 頓首して曰く，「〔張〕敏の言是なり。皇子 潛かに西内に養わる，今已に六歳なり。匿して敢て聞せず」と。帝（憲宗成化帝）大いに喜び，即日西内に幸し，使を遣りて皇子を往迎せしむ。使 至り，宣詔（詔を伝える）す。妃（孝穆紀太后）皇子を抱き泣きて曰く，「兒（祐樞：後の孝宗弘治帝）去け。吾（孝穆紀太后）生きるを得ず。

を聴き、以て婦順を明章す」〕。

萬貴妃はもともと宮人で、東駕盥櫛を管理していた。悪賢い智謀でうまく媚びた。そうして寵を専らにした。昭徳宮に住み、宦官の段英が奥向きのことを取り仕切り、萬貴妃の親族の萬通・萬喜・萬達らと権力をほしいままにした。大學士の萬安は、姓が萬ということから同族と認められ、劉吉とこれに付き従った。朝廷の官僚の恥知らずで出世だけを望むものたちは、その門下に群れ集まった。成化五年（1469）九月に憲宗成化帝は昭徳宮に幸した。この時、紀氏は御妻の地位にいた。こうして懷妊した。権勢を極めていた萬貴妃は、このことを知ると、手を尽くして子が生まれないよう邪魔をした。しかし、胎児は無事であった。憲宗成化帝は、安樂堂に移るよう命じ、腹中に塊ができる病気になったと偽らせた。成化六年（1470）七月三日、今上皇帝（孝宗弘治帝）はお生まれになった。紀氏は、母乳が少なく、宦官の張敏が侍女に米粉で作った食べ物で育てること一月にわたった。西内にいらっしゃった廢後の吳氏がこまかに気を配って養った。まだ命令を受けなかったので、頭髮は生まれた時のままで剪ることもなかった。成化七年（1471）十一月、憲宗成化帝の第二子の祐極が、正式に皇太子に即いたものの、成化八年一月二十六日に痘瘡で亡くなってしまう。禁中では、この時ようやく西宮におひとりの皇子がいらっしゃると伝わった。上（憲宗成化帝）は、心にたいそうこの皇子のことを思ったが、萬貴妃が忌むことを心配した。成化十一年（1475年）五月、宦官の張敏は、萬貴妃の

兒（祐極：後の孝宗弘治帝）黃袍の鬚有る者を見れば、即ち兒（祐極：後の孝宗弘治帝）の父なり」と。皇子（祐極：後の孝宗弘治帝）小緋袍を衣て、小輿に乗り、擁かれて階下に至る。髪地に披がり、走りて帝（憲宗成化帝）の懷に投ず。帝（憲宗成化帝）之を膝に置きて、撫して視る。久之くして悲喜し、泣き下りて曰く、「我が子なり。我に類（似）たり」と。懷恩をして内閣に赴かせ其の故を具さに道わしむ。羣臣 皆大いに喜ぶ。明日、入りて賀し、詔を天下に頒く。妃（孝穆紀太后）を移して永壽宮に居らしめ、數しば召見す。萬貴妃 日夜怨み泣きて曰く、「羣小 我を給けり」と。其の年の六月、妃（孝穆紀太后）暴かに薨ず。或いは曰く、「萬貴妃 使をして妃（孝穆紀太后）に死を賜う、と。或いは曰く、自縊するなり、と。諡を賜いて「恭恪莊僖淑妃」とす。〔張〕敏 懼れ、亦た金を吞みて死す。〔張〕敏は、同安の人なり。孝宗 既に立ちて皇太子と爲りし時、孝肅皇太后 仁壽宮に居す。帝（憲宗成化帝）に語けて曰く「兒（祐極：後の孝宗弘治帝）を以て我に付せ」と。太子（祐極：後の孝宗弘治帝）遂に仁壽に居す。一日、〔萬〕貴妃 太子（祐極：後の孝宗弘治帝）を召して食せしむ。孝肅〔皇太后〕太子（祐極：後の孝宗弘治帝）に謂いて曰く、「兒（祐極：後の孝宗弘治帝）去け。〔しかし〕食すること無し」と。太子（祐極：後の孝宗弘治帝）至り、〔萬〕貴妃 食を賜うに、曰く「已に飽（まんぷく）たり」と。羹を進む。曰く、「羹に疑うらくは毒有らん」と。〔萬〕貴妃 大いに悲りて曰く、「是の兒（祐極：後の孝宗弘治帝）數歳にして即ち是の如し。他日我を魚肉（思うままにする）せん」と。悲りに因りて疾と成る……（『明史叢』列傳第一・后妃上・「孝穆紀太后」・十六葉～十七葉：『明史』卷一百十三・列傳第一・后妃一・「孝穆紀太后」とは文字の異同が少しある）。

①『萬曆野獲編』補遺卷一・宮闈・「女秀才」条に「凡そ諸々の宮女 曾て内臣の教習を受く。書を讀み文理に通ずる者は、先ず女秀才と爲し、遞（続いて）して女史に陞り、宮官に陞り。以て六局掌印に至る」。

②沈德符は、『萬曆野獲編』（卷三・宮闈・「孝宗生母」条）に、恐らく『明史叢』が基づいた于慎行『穀山筆塵』（卷之二・紀述一・二葉）を「後、萬妃 曾て皇子を食に召す。毒有るを以て辭す。妃 因りて忿り語ぐ能わず。以て疾と成るを致す」と要約し「〔萬貴妃が薨じたのは〕、〔孝宗弘治帝が〕太子に立ちし時を距つこと又た十三年なり。安くんで忿りて語ぐ能わず疾と成るの説有るを得んや」という。

腹心の宦官の段英と親交を深め、萬貴妃の機嫌がいい時を見計らって、皇子のことを進言した。萬貴妃は認め、上（憲宗成化帝）は召し出した。頭髮はすでに額にまで達していた。お互いの気持ちは通じあい、抱き合って泣き感激した。言葉遣いや挙止は非凡であった。上（憲宗成化帝）は、皇子を撫でてたいそう喜ばれた。萬貴妃は礼服を着て禮物を進呈した。こうして内閣に皇子の名前を擬定させること数度にいたり、上（憲宗成化帝）がご自身でお名づけになり、仁壽宮に送り養育させた。中外ではこのことを聞き、ともに喜んだ。紀氏は、萬貴妃から觴^{さかずき}を授けられ、病氣となった。西内の永壽宮に移り住んだ。成化十一年六月一日、文武の大臣は皇太子を立てることを願い、七日に奏上がなされた。憲宗成化帝は、皇子のいま少し成長するのを待って皇太子にするように命じた。この六月二十八日、皇子（今の孝宗弘治帝）の生母の紀氏が亡くなった。そこで淑妃を追贈した。都では、口々に騒ぎ立て、紀氏が鳩毒で亡くなったと言いつつ。十一月に皇子（今の孝宗弘治帝）を立てて皇太子とした。後に、孝宗弘治帝が即位するにあたって、生母の紀氏に尊号を追贈して「孝穆皇太后」とした、という。

こうして、公にされてこなかった第三子の祐樞（後の孝宗弘治帝）が成化十一年十一月八日に皇太子に冊立される。この成化十一年の時も、第二子の祐極が皇太子となった時と同じようにまず大赦が行なわれている。ただ、今回は星變の対応のためなのか、大赦以外に特に恩寵は下されなかったが、この第三子の祐樞（後の孝宗弘治帝）の時は、大赦の詔が出された後も次々と以下のような恩寵が下されている。

まず成化十一年十一月癸丑（八日）に、第三子の祐樞（後の孝宗弘治帝：成化六年七月三日生）が皇太子となる。

〔成化十一年十一月〕癸丑（八日）、皇太子に冊立す……（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之一百四十七・「成化十一年十一月癸丑（八日）」条）。

その日に、皇太子冊立の儀式が成立したことから、皇太子冊立を天下に詔して、大赦が出される。

是の日（成化十一年十一月癸丑（八日））、皇太子を冊立するの禮の成るを以て天下に詔告す……（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之一百四十七・「成化十一年十一月癸丑（八日）」条）。

そして、十一月十二日には臣下に祝いの品が下される。

〔成化十一年十一月〕丁巳（十二日）、皇太子を冊立するの禮の成るを以て、禮部に命じて賞賜の等第（等級）を定めしむ。文武の官は、自公・侯・駙馬・伯・左右都督同知・衍聖公・尚書・都御史もて一等と為し、都督僉事・左右侍郎・〔左右〕副都御史・都指揮使・都指揮同知・〔各部署の〕僉事・大理・光祿・太僕の〔各〕寺の卿・順天府尹・左右通政・大理〔寺〕・太常〔寺〕・太僕〔寺〕の少卿、鴻臚〔寺〕の卿・少詹事・〔國子監〕祭酒・〔應天府と順天府の〕府丞・各衛の掌印指揮・錦衣衛の指揮同知と〔指揮〕僉事もて二等と為し、學士・侍讀・侍講學士・通政司の叅議・大理〔寺の寺〕丞・各衛の指揮使・指揮同知・

僉事・春坊の庶子と諭德、尚寶司卿と少卿・太醫院使・欽天監〔監〕正・光祿〔寺〕と鴻臚〔寺〕の少卿・帶俸・布政司〔左右の〕叅議もて三等と為し、文武衙門の五品・六品・七品官もて四等と為し、各衙門の七品の首領官・五城副兵馬〔指揮使〕・京縣の縣丞・五官靈臺郎（天文官）・上林苑^マ監^マ丞（上林苑監丞）并せて八品・九品の雜職及び國子監官もて五等と為し、綵款表裏（文彩のある衣服）を賜うに差有り。南京の文武官は、成國公朱儀及び各堂の上官等五十九人 官を遣りて之に齎賜す（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之一百四十七・「成化十一年十一月丁巳（十二日）」）。

十一月二十六日には、朝鮮國・安南國に使者を派遣して文錦錦緞を下賜している。同日に、大量の武官たちなどに下賜品が出されている。

〔成化十一年十一月辛未（二十六日）〕皇太子を冊立するを以て戸部郎中の祁順・禮部郎中の樂章もて正使と為し、行人司左司副の張瑾・行人の張廷綱もて副使と為し、詔を齎（もたら）せ朝鮮・安南國に往き開讀（皇帝の詔旨を読み聞かせる）せしめ、其の國王及び妃に綵款文錦（文彩のある錦緞）を賜うに、各々差有り○皇太子を冊立するを以て、守衛京操官軍及び將軍・力士・校尉・勇士等に絹、布官二萬二千七百八十九員人に絹一疋、軍及び將軍等二十萬四千九百九十八名人に布一疋を賜う（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之一百四十七・「成化十一年十一月辛未（二十六日）」）。

翌月の六日には、遼王豪壘と靖江王規裕に下賜品が贈られる。

〔成化十一年十二月〕辛巳（六日）、遼王豪壘等に白金二百兩と紵絲・紗羅各々八疋と錦四疋と高麗白^マ縐絲と西洋等の布各々十疋と絹十六疋を賜う。靖江王規裕に白金半の錦四款と紵絲・紗羅・高麗白^マ縐絲・西^マ羊（洋）等布各々六疋と絹十二疋を賜う。皇太子を冊立するを以ての恩なり（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之一百四十八・「成化十一年十二月辛巳（六日）」）。

遼王豪壘は、太祖洪武帝の第十五子の植の孫にあたる。初代の遼王植は、太祖洪武帝の時に辺境でしばしば軍功を立てるものの、永樂帝に嫌われる。二十二年に子の貴烺が嗣ぐが、宣德四年に不行跡のため廢されて庶人となり、弟の貴煥が嗣ぐ。そして成化七年にそれを嗣ぐのがこの豪壘である（『明史』卷一百十七・列傳第五・諸王二・太祖諸子二・「遼王植」条による）。また、靖江王規裕は、太祖洪武帝の從孫の守謙の五代目にあたる。初代靖江王守謙の父は朱文正である。朱文正は、明朝建国にあたってたいへんな軍功をあげたものの、論功行賞に不満があり、太祖洪武帝によって監禁されて亡くなる（『明史』卷一百十八・列傳第六・諸王三・太祖諸子三・「靖江王守謙」条による）。

遼王府・靖江府ともに、唐突に「皇太子を冊立するを以ての恩」として下賜品が出ているのである。強いて両王府の共通点を求めれば、ともに先代が処分を受けているということであろうか。

こうしてこの一週間後の十二月十三日に、憲宗成化帝は、「郕王（景泰帝）の帝號・尊諡を

復すること及び陵寢（陵墓）を修飾（手直ししてよくする）するを會議」させている。臣下からの提案がなく、まったく唐突に憲宗成化帝は命じている。

第二子の皇太子祐極冊立にあたっては、彗星が現われ、慣例のとおり天下に大赦を命じただけで、皇太子が亡くなる。それに対して、第三子祐樞が皇太子に冊立されると、次々と恩寵が下される。天下に大赦令を出し、末端の官員にまで下賜が行なわれるだけでなく、朝鮮國・安南國や、特に家庭で不祥事があった二人の王府に下賜品をあたえている。そうして、郕王（景泰帝）の帝號についての提言である。

もしも、こうした恩寵の流れの中に郕王（景泰帝）の帝號の復活（皇帝と名乗ることを認めること）を位置づけることができるならば、憲宗成化帝の突然の郕王（景泰帝）の帝號の復活の命令は、皇太子祐樞の健やかな成長のために行われたと推測できないだろうか。

なお、沈德符（字は景倩、又の字は虎臣、号は景伯・清權堂・敝帚軒・甕汲軒。浙江嘉興の人。明・萬曆六年〔一五七八〕～明・崇禎十五年〔一六四二〕。萬曆四十六年〔一六一八〕の舉人）も、『萬曆野獲編』のなかで、「蓋うに^{おも}」として、第三子の祐樞（後の孝宗弘治帝）の皇太子冊立と郕王（景泰帝）の称号復活とを関連付けている。

【景帝廢后】成化十一年十二月、上（憲宗成化帝）郕戾王に追復し、舊^{もと}の帝號に仍らしむ。尋いで諡^{たてまつ}を上りて「恭仁康定景皇帝」と曰う。且つ書を周王等の各府に致し、詔もて天下に告げて云う「之を聖母皇太后（宣宗宣德帝の皇后孫氏：英宗の生母）に請う」と、亦た云う「先帝（英宗）の遺意より出づるも、不幸にして上賓し、未だ舉行するに及ばず。茲に奉^うけたる慈訓（聖母皇太后（皇太后孫氏）の教誨）もて誕^{おおい}に在廷（朝臣）に告げ、用て先志を成す。仍お有司をして陵寢を修葺せしむ」と。蓋うに是^{おも}の年の十一月に已に孝宗（第三子の祐樞）を立てて皇太子と爲し、海内に大赦す。上（憲宗成化帝）郕邸を追崇（封號を追加する）せんと欲するを意^{おも}う。而れども赦書に於いて之を發し難し。故に特に詔を下し以て崇奉を示す。亦た首揆（宰相）の商文毅（商輅）等の苦心なり……（『萬曆野獲編』卷三・宮闈・「景帝廢后」条）。

①（三）で検討するが、実際には郕王（景泰帝）の称号を回復したという詔は公布されなかった。

成化十一年十二月に憲宗成化帝は、郕王（景泰帝）の称号を回復して、もとの帝號によることにさせた。続けて「皇帝として」の諡の「恭仁康定景皇帝」を贈った。そして書簡を周王府などに送り、詔を天下に公布して「[帝號の復活などの処遇を] 聖母皇太后（宣宗宣德帝の皇后孫氏：英宗の生母）にお伺いした」といい、また「[この処遇は]、先帝（英宗）のお考えに出るのであるが、先帝（英宗）は不幸にしてお亡くなりになってしまい、実施できなかった。ここに聖母皇太后（皇太后孫氏）のお教えをうけて、朝臣に告げて、先帝（英宗）のお考えを完成させたい。あわせて郕王（景泰帝）の陵墓も修復させる」という。これは恐らく以下のような理由からではないか。それは、同年の十一月に第三子の祐樞（後の孝宗弘治帝）を皇太子に冊立して、天下に大赦を行なっている。憲宗成化帝は、郕王（景泰帝）に封號を追加したい

と考えた。しかし、このことは、大赦のなかには加えにくい。そこで特に詔を出して尊重した。これは、首揆（宰相）の商輅たちが苦心して考えたことである、という。

しかしながら（三）で検討するが、実際には郕王（景泰帝）の称号を回復したという詔は公布されなかった。

では、続けて郕王（景泰帝）の帝號・尊諡の復活について検討してみたい。

（三）

第三子祐樞（後の孝宗弘治帝）が冊立された翌月の成化十一年十二月戊子（十三日）に、憲宗成化帝は、唐突に郕王（景泰帝）の帝號・尊諡を復することと陵寢（陵墓）を修飾（手直ししてよくする）することを會議させる。

[成化十一年十二月] 戊子（十三日）、命じて郕王（景泰帝）の帝號・尊諡を復すること及び陵寢（陵墓）を修飾（手直ししてよくする）するを會議せしむ。上（憲宗成化帝）廷臣に勅して曰く、曩者^{さき}に、朕（憲宗成化帝）の叔の郕王（景泰帝）踐阼し、戡難（禍乱を取り除く）して邦を保ち、宗社を奠安（安定）すること、亦た既に有年なり。寢疾（病臥）し臨薨の際に及び、姦臣 功を貪りて事を生（生事：騒動を起こす）じて、妄りに讒搆（讒言して陥れる）を興し、[郕王（景泰帝）の] 帝號を去らんことを請う。先帝（英宗）尋いで誣枉（罪のない郕王（景泰帝）を誣^{そし}って罪に落とす）なるを知り、深く悔恨を懷く。次（順次）を以て姦を法に抵^あつ[しかし英宗は]、不幸にして上賓し、未だ舉正（罪を列举して法でもって正す）に及ばず。朕（憲宗成化帝）大業を嗣承（繼承）し、茲に于いて一紀（十二年）なり。毎に思うに儒先^① 言有り。[それは]「祖父 爲さんと欲するの志有りて未だ爲さざること有れば、子孫 善く其の志を繼ぎて之を成就す」と。此れ所謂ゆる孝なり。間（近頃）に[郕王（景泰帝）の] 帝號の復するを以て諸を聖母皇太后（宣宗宣德帝の皇后孫氏：英宗の生母）に質^{ただ}すに、亦た云う「此れ先帝（英宗）の本意なり。宜しく即ち舉行せよ」と。朕（憲宗成化帝）祇だ慈訓を服し、敦く親親（親族への恩情を尽くす）を念い、在廷（朝臣）に誕告（幅広く告知する）し、用って先志を成さん。其れ郕王（景泰帝）は舊^{もと}の皇帝の號に仍る可し。所有（ここで論点となっているところの）尊諡は、禮部 會議し以て聞せよ。務めて人心に合わし、典禮に乖くこと母れ。仍お所司をして修飭（整備）せしむる陵寢は、勅の如くし、奉行（実行）せよ（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之一百四十八・「成化十一年十二月戊子（十三日）」条）。

①『中庸』第十九章第二節の「夫孝者、善繼人之志、善述人之事者（夫れ孝なる者は、善く人の志を繼ぎ、善く人の事を述ぶる者なり）」の新安陳氏の注に「新安陳氏（陳櫟）曰、祖父有欲爲之志而未爲、子孫善繼其志而成就之……（新安の陳氏（陳櫟）曰く、祖父 之を爲さんと欲するの志有りて未だ爲さず、子孫 其の志を善く繼ぎて之を成就す……）」（『四書大全』中庸章句大全上・『中庸』第十九章第二節所引）。

憲宗成化帝が、郕王（景泰帝）の帝號・尊號を復活し、その陵墓の手直しすることについて会議して意見を提出するように命じた。上（憲宗成化帝）は、廷臣たちに命令を下して「以前、朕（憲宗成化帝）の叔父の郕王（景泰帝）が帝位を受け継ぎ、禍乱を取り除いて領土を守り、国家を安定させること長年にわたった。病に臥せて亡くなる時に、姦臣が手柄を求めて騒動を起こしたり、讒言して陥れたりして、郕王（景泰帝）の帝號を除くことを願い出た。先帝（英宗）は、まもなく罪のない郕王（景泰帝）が誣^{そし}られて罪に落とされたことをお分かりになり、深く後悔の念を懷かれた。そこで、次々と姦臣たちを罪に問われたが、不幸にしてお亡くなりになり、すべての罪を列挙して法でもって正すことはおできにならなかった。朕（憲宗成化帝）は、帝位を引き継ぎ、ここに十二年となる。いつも、先孺の「祖父 爲さんと欲するの志有りて未だ爲さざること有れば、子孫 善く其の志を繼ぎて之を成就す。」という言葉を思い返している。これこそ「孝」である。近頃、郕王（景泰帝）の帝號の復活を皇太后（宣宗宣德帝の皇后孫氏：英宗の生母）にお尋ねとしたところ、「これは先帝（英宗）の本意である。すぐに事を行なうべきである」とおっしゃった。朕（憲宗成化帝）は、ただ皇太后（宣宗宣德帝の皇后孫氏：英宗の生母）のお教えに従って、あつく親族への恩情を尽くすことを思い、廷臣たちに広く告知して、先ごろからの念願を果たしたい。そこで、郕王（景泰帝）の言い方は、もとの帝號を用いてもよい。そして、ここで論点となっているところの尊諡について禮部で集まって議論して報告せよ。つとめて人々の感情に沿ったものとせよ。ただし、典礼に背くものであってはならない。なお、関係の役所に整備させる陵墓は、詔勅に従い、命令のとおりに行せよ、という。

功績があった郕王（景泰帝）の帝號が除かれたのは、奸臣たちが行なったことであり、先帝（英宗）は帝號の復活を望んだが、果たせなかった。だから、帝号の復活は、先帝（英宗）の意志であり、皇太后（宣宗宣德帝の皇后孫氏：英宗の生母）も同意したということから行なうのであるという。ただし、父の英宗のが「郕王」に贈った「戾」という諡についてはまったく言及がない。また、公式的には、景泰帝を郕王に降格させたのは、皇太后孫氏（宣宗宣德帝の皇后孫氏：英宗の生母）の諭（懿旨）によってである（拙稿「明・景泰帝の諡号「戾」について」（『経済理論』第384号）152頁～155頁参照）。

こうして十二月十七日に文武の群臣や英國公の張懋などが、郕王（景泰帝）の帝號を復活して、「恭仁康定景皇帝」という尊諡を贈ってもらいたいという提案を行なう。

壬辰（十七日）、文武の群臣・英國公張懋等 郕王（景泰帝）の帝號、乃ち尊諡を復するの議を上つてて■（一字不明）曰く、仰そも惟^{おも}うに郕王（景泰帝）^{つと}早に王爵^{にな}を僭い、藩を京師に（臣と稱す）奉ず。先帝（英宗）の北狩の秋・虜寇の南侵の日に當りて、郊畿（国都の内外）震動し、神器（帝位）虚危なり。乃ち傳授の命を慈闈（皇太后）に仰ぎ承け、擁戴（推戴）の情（輿論）を臣庶（臣民）に俯從（聞き入れる）す。大位（帝位）に嗣登し、「弘^{おお}いに艱難^{すく}を濟^①う」。賢才を拔擢し、群策を延攬（受け入れ）う。旁^{ちか}きは既に潰える

の士卒を収め、遠くは深く入るの虜鋒を却く。京城を保固（強固に防禦する）し、宗社を奠安（安定）す。申ねて戦守（和戦両様）を嚴（準備）するの師もて、再び〔英宗を〕奉迎の使を遣り、卒に虜酋に悔過（過ちを悔いる）を致す。先帝（英宗）回鑾（帰還）し、尊養（尊敬して養う）の禮 加うる有り、讒間（讒言して他人を離間させる）の言 入る 罔し。始終すること八載、兩官（英宗と憲宗成化帝）を全護（安全に保護する）す。仁恩（仁愛恩德）寰區（天下）に覃被（ひろく施し及ぶ）し、而して夷夏（夷狄と華夏）の民安堵す。威武 海宇に奮揚（力強く表彰する）し、而して閩・廣の寇 俘を獻ず。盖し亦た有為の君なり。末年の寢疾（臥病）遽かに懼るに屬し、臣下の姦謀 巧みに讒間を肆にし、薨ずるに臨みて、帝號を削らんことを請うを奈せん。既に逝くに於いて、尚お先皇（英宗）の覺悟に頼り、旋いで姦宄（悪徒）を誅夷（誅殺）に抵つ。〔先皇（英宗）の〕舉正（誤りを正す）の未遑（間に合わない）と雖も、實に詒謀（天下を順える謀を伝え、子孫を安んじる）を待つ有り。恭しく惟うに皇帝陛下（憲宗成化帝）明は日月より高く、量は乾坤（天地）より廓し、孝道は丕隆（手厚さを極める）なり。〔そこで、先帝（英宗）の〕為さんと欲する所の素志（平素の願い）の綸音（帝王の詔令）を承け、景泰の已に有する所の徽稱（褒めたたえる称号）を復するを渙布（詔勅を發布する）す。〔そうして〕、上は在天の靈を慰め、下は率土（王土）の議に協い、敦禮（禮教を尊崇する）倫を正すこと、誠に遠く千古を超ゆ。流芳（美しい聲譽）類を錫い、殆ど萬年に茂衍（繁盛）せんとす。臣等命を聞き忻忭（喜び）に勝えず。謹しみて聞見の蹟を摭（搜集）し、庸つて群議の公を陳ぶ。〔その結果〕、宜しく尊諡を上つりて「恭仁康定景皇帝」と曰うべし。臣等 拜手稽首して謹しみて議（提案）す（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之一百四十八・「成化十一年十二月壬辰（十七日）」条）。

①『書經』顧命に「弘濟于艱難（弘いに艱難を濟え）」。

②『詩經』大雅・文王有聲に「詒厥孫謀、以燕翼子（厥の孫謀を詒し、以て翼子を燕ず）」とあり、鄭箋に「傳其所以順天下之謀、以安敬事之子孫（其の天下を順える所以の謀を傳え、以て事を敬するの子孫を安んず）」と解釈するのに基づく。

③『詩經』大雅・既醉に「孝子不匱、永錫爾類（孝子 匱さず、永く爾に類を錫う）」。

文武の群臣・英國公の張懋などが、郕王（景泰帝）の帝號、つまり諡號を復活させる提案を奉つて言う「そもそも、郕王（景泰帝）は、早くから王に任ぜられ（宣德十年二月九日に郕王となる）、北京で臣と称していました。先帝（英宗）が北方においてになってしまわれ、虜の賊が南に侵攻してきた時になって、国都の内外は、震え動き、帝位は空位となりました。そこで皇位繼承の命令を皇太后に求めて、推戴の願いを臣や民から聞き入れ、帝位を繼承し、立派に危機を救いました。徳がある者や才能のある者を抜擢し、いろいろな提言を進んで受け入れました。近くでは潰えた士卒を収めて、遠くでは深く侵略してきた虜の鋭鋒を退けました。京城を強固に防禦し、国家を安定させました。重ねて和戦両様の準備をさせた軍隊をおき、ふたたび

英宗を迎える使者を送り、とうとう虜酋に過ちを悔いるようにさせました。先帝（英宗）がご帰還になり、郕王（景泰帝）は尊養（尊敬して養う）の禮を加えられ、お二人の間を悪くさせるような讒言は、入る余地がございませんでした。八年の間、ずっと英宗と太子であった憲宗成化帝を安全に保護なさいました。仁恩（仁愛恩徳）は、天下にひろく施し及び、夷の民も中華の民も安堵しました。威厳は、国内に力強く表彰され、南方の閩・廣地域の侵略者も自分たちが捕獲した俘虜を献じて帰順してまいりました。やはり有為の君でしょう。しかし、晩年に臥せるような病ににわかに罹られることになり、臣下のものの邪悪な計画で、お二人の間を悪くさせるような巧妙な讒言が横行するようになり、お亡くなりになると、帝號の削除することを願い出ることをどうすることもできませんでした。やはり先皇（英宗）がお悟りになったおかげで、たちまち邪悪な人間を、誅殺されるに至りました。先皇（英宗）が誤り正されるには、すでに間に合わないとしましても、実際にその詒謀（天下を順える方策を伝え遺し、子孫を安んじる）のおこころざしは〔お子様である皇帝陛下（憲宗成化帝）が行なうことで〕まだまだ間に合います。恭しく思いますに、皇帝陛下（憲宗成化帝）は、明察でいらっしゃることは日月よりも高く、思慮深さは天地よりも広く、孝でいらっしゃることは手厚さを極めておられます。そこで、先帝（英宗）が平素からなさりたいと思っておられた詔を受け継がれ、景泰帝の前から持っておられたすばらしい称号の復活する命令を發布なさいました。そうして、上は在天の靈を慰め、下は国家の提案に協い、禮教を尊崇し、人倫を正すことが、ほんとうに悠久なものとなってゆきます。また、美しい聲譽は善を天から賜ることになり、ほとんど永遠に盛んとなります。臣下のものは、陛下（憲宗成化帝）のご命令を聞き、喜びにたえません。つつしんで調査して得たことを搜集め、提案の公正なものを申し上げます。結果といたしましては、尊号は「恭仁康定景皇帝」となさるべきかと存じます。臣下の者たちは、拜手稽首して謹んで提案いたします、という。

やはり、功績があった郕王（景泰帝）の帝號が除かれたのは、奸臣たちが行なったことであり、それを知った先帝（英宗）は、帝號の復活を望んだが果たせなかった。憲宗成化帝が、先帝（英宗）の志を継いで帝號（諡號）を復活させることを命ぜられたのは非常に素晴らしいことである、とするのである。

そして、憲宗成化帝は、二十四日に翰林院に諡冊を撰するよう命じ、天地・宗廟・社稷に報告の儀式を行なう。この時、翰林院が撰した諡冊はつぎのようなものである。

維れ成化十一年歲次乙未十二月丙子朔二十四日、姪嗣皇帝見濡 謹みて再拜稽首して上言す。伏して以^{おも}うに功業の盛なる者は宜しく徽稱（尊號）を享^うくべきかな、孝愛^①の隆き者は志を繼ぐよりも先なるは莫し。恭しく惟うに叔父郕王（郕王景泰帝）多難の秋に當るに比^{おも}び、俯して群臣の請^{したが}に徇い、朝に臨みて踐阼（即位）し、奮武揚兵（閱兵）し、虜の勢を方張（勢いが盛んであるところ）に却^{しりぞ}け、[捕虜になった] 鑾輿（天子の車駕：英宗を指す）の過に復るを致し、宗社を奠安（安定）し、邦家を輯寧（安撫）す。敬養（奉養）奉尊（尊

重)を備え、恵化(すぐれた政治と教化)逮下(下に及ぶ)に^{あまね}周し。偶々寢疾(臥病)に因りて遂に彌留(久しく病んで癒えない)に至る。皇考(英宗)天に應じ人に^③順い、大位(帝位)を復正(正統な状態に回復する)す。眷^{かえり}み^{おも}惟うに同氣(兄弟)初めは間言(異議)無し。姦臣の貪功もて妄りに異議を生ず。[景泰帝の]帝號を去り王封(郕王)に退け就くを^{いかん}請うを奈せん。皇考(英宗)の日月の明灼に頼りて、誣枉(郕王景泰帝が^{そし}誣られて罪に落とされた)なるを知り、姦を法に^あ抵て、舊稱を復せんことを擬す。[しかし]、不幸にして上賓し、因りて未だ果せず。姪 大業(帝業)を嗣守し、敦く親親(親族への恩情を尽くす)を念う。間(近來)、[郕王の]帝號の復するを以て聖母に請い、伏して慈旨(慈母の教誨)を承け、欣然として允從(承諾)す。是用(これによって)至公を參合し、^{つつ}祇しみて鴻號(美稱)を薦^{たてまつ}り、叔父(郕王景泰帝)の盛烈(盛大な功業)を昭らかにし、皇考(英宗)の素心(本心)に^そ副わん。謹みて英國公張懋を遣りて冊寶を奉じて、尊諡を上つりて「恭仁康定景皇帝」と曰う。伏して^{かんが}惟うに神靈 在るが如し、鑒て是れ用^もって^う飲け、慶なるを錫(賜)いて流芳(美德が広まる)、永永に極まる^④無く、謹みて言う(『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之一百四十八・「成化十一年十二月己亥(二十四日)」条)。

①『禮記』文王世子に「戦則守於公禰、孝愛之深也(戦うに則ち公禰(先祖の位牌)を守るは、孝愛の深きなり)」。

②『書經』禹貢に「二百里奮武衛(二百里は武を奮^{きも}いて衛る：武力を奮って国の守りにあたる)」。

③『易』革卦彖傳に「湯武革命、順乎天而應乎人、革之時大矣哉(湯武 命を革めて、天に順いて人に應ず。革の時 大いなるかな)」。

④『大戴禮記』公符に「陛下永永、與天無極(陛下 永永たりて、天と極まり無し)」。

成化十一年十二月二十四日、甥の皇帝の見濡(憲宗成化帝)謹んで再拜稽首して申し上げます。伏して以下のように思います。功績の盛んな者は尊号を授かるべきで、孝愛のたかいということは、先人の志を継承することが最も尊重されます。考えると伯父の郕王(郕王景泰帝)は、困難な時期に直面し、臣下の要請に従い、朝廷で即位し、武力を奮って挙兵し、異民族の勢いが盛んであるところを退け、捕虜になられた英宗をすみやかに取り戻し、政府を安定させ、国を落ち着かせになりました。[肉親を]敬い養う(『禮記』祭義)こともきわめて丁寧になさい、すぐれた政治と教化は下々にあまねくおよびました。そのような時、たまたまご病気のため、長患いされることになりました。そして、父の英宗は、天命に応じ、人心に順じて、帝位にお戻りになりました。顧みて思いますに兄弟(英宗と郕王景泰帝)は、はじめは異論はありませんでした。姦臣が功績を貪り求めるために妄りに異論を作りだしました。そのため、景泰帝の帝號を除き去りもとの郕王にしたいという請願をどうしようもできませんでした。しかし、父の英宗は、日月のような明るく照らし出すことによって、郕王景泰帝が誣いられて罪に落とされたことを理解され、姦臣たちを処罰し、景泰帝の帝號をもとに戻そう、とお決めになろうと

なさいました。ところが不幸にしてお亡くなりになり、このことは果たすことができませんでした。甥である私（憲宗成化帝）は、帝位を受け継ぎ、あつく親族への恩情を尽くすことを考えました。近頃、郕王の帝號の復活させることについて祖母皇太后にお願いし、皇太后がお喜びになって出されたお許しの命令書を受け取り、よろこんで承諾した。こうしたことから、至って公正さに満ちて、つつしんで美稱を「郕王」に奉って、叔父（郕王景泰帝）のすぐれた功績を明らかにし、皇考（英宗）の素心（素願）に沿いたいと思う。つつしんで英國公張懋を派遣して冊寶を奉じて、「恭仁康定景皇帝」という尊号を奉ります。伏して思いますに、神靈がいっしょになるように、鑑として敬け奉り、慶事を賜わり美德が広まり、永遠に極まることのないように、謹んで以上のことを申し上げます、という。

これまでの議論を受け、功績があった郕王（景泰帝）の帝號が除かれたのは、奸臣たちが行なったことであり、それを知った先帝（英宗）は、帝號の復活を望んだが果たせなかった。憲宗成化帝が、先帝（英宗）の志を継いで帝號を帝號、つまり諡號を復活させることを命じた、というのである。

ところが、この日に尊諡^{たてまつ}を上る儀式が終了して、禮部が、郕王の帝位を復活させたい、「恭仁康定景皇帝」という諡號を贈ったことを詔として天下に布告することを求めたところ、憲宗成化帝は「之を^やめよ」と命ずる。

禮部 奏すらく、恭仁康定景皇帝の尊諡^{たてまつ}を上るの禮成りて、詔もて天下に告げんことを乞う、と。上（憲宗成化帝）曰く、之を^やめよ、と（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之一百四十八・「成化十一年十二月己亥（二十四日）」条）。

天下に公示して周知させることは認めなかったのである。ただし、陵墓の祭祀は皇帝と同じ格式で行なうことは認める。

〔成化十一年十二月〕庚子（二十五日）、太常寺 奏すらく、恭仁康定景皇帝の陵寢の舊の祭は、少牢^①を用い、内官（太監）を遣りて行禮す。今、既に尊諡^{たてまつ}を上れば、其の祭儀^{なら}びに遣官（派遣する官員）は、長（長陵：永樂帝の陵の名）・獻（獻陵：仁宗洪熙帝の陵の名）諸陵の如くせんことを請う、と。之に従う（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之一百四十八・「成化十一年十二月庚子（二十五日）」条）。

①『禮記』王制に「天子社稷皆太牢、諸侯社稷皆少牢（天子の社稷は皆な太牢、諸侯の社稷は皆な少牢）」。

成化十一年十二月庚子（二十五日）に太常寺が以下のように奏上した。その内容は、恭仁康定景皇帝の陵墓のものと祭祀は、諸侯の社稷の祭祀として少牢（羊・豕）を供え、太監を派遣して儀式を執り行いました。今、景泰帝に「恭仁康定景皇帝」という諡號が奉られましたので、その祭祀並びに派遣する官員は、永樂帝の陵や仁宗洪熙帝の陵墓のようにすることを願います、というものであった。そして、その提案は、聞き入れられたというのである。

憲宗成化帝は、郕王（景泰帝）の帝號を復活させるよう命じたものの、天下に周知させなかった。また、陵墓の祭祀の儀式は明朝歴代の皇帝と同じように「太牢」を用いることは認めたも

のの、皇帝の廟（宗廟）に入れることは認めなかった。ということは、帝號を復活はあくまで皇太子（第三子祐樞：後の孝宗弘治帝）の即位に対する恩寵の一環であるという気持ちの反映だったのだろうか。

談遷（原名は以訓，字は孺木・仲木，号は射父・觀若・容膝軒・江左遺民。浙江海寧の人。明・萬曆二十二年〔一五九四〕～清・順治十四年〔一六五七〕）も『國權』に、

〔成化十一年十二月〕己亥（二十四日），上（憲宗成化帝）「恭仁康定景皇帝」と諡す。〔し
かし〕詔を頒せず（『國權』卷三十七・「憲宗成化十一年十二月己亥（二十四日）」条・
二三六一頁）。

と記し。諡を贈ったことを記録した後に、その詔を頒布させなかったことを特に書き加えている。そして、『窺天外乘』から王世懋（字は敬美・叔美，号は澹園・澹圃・麟洲・日損齋など。江蘇太倉の人。嘉靖三十八年己未科（一五五九）三甲一百四十七名の進士：王世貞の弟）のつぎのようなコメントを引用して付記する。

王世懋 曰く、景帝 乾坤（国家）を再造（再生）し，終に英廟の子孫に億萬年の祚（福運）を貽す。當時、「郕戾王」の諡は，未だ人心に^{かな}慚わず。大なるかな憲皇（憲宗成化帝），景帝を追稱（追頌）して，元氣を挽回する所多し。臣（王世懋）以爲らく^{おも}既已に帝たり，改めて「宗」を稱して，廟に入れざるは，過ちと爲さざるなり。即ち以爲らく大事は^{しば}數し^かば更うる可からざればなり。「實錄」の「郕戾王」と書して附顯するは是れ矛盾なるが如きも，亟かに改む可からざらんや（『國權』卷三十七・「憲宗成化十一年十二月己亥」条・二三六一頁～二三六二頁）。

景泰帝は，土木の変で危機に瀕した国家を再生し，英宗の子孫にとこしえの福運（帝位）を遺した。当時。郕王（景泰帝）に贈られた「戾」という諡は，人々に違和感をあたえた。立派なことに憲宗成化帝は，郕王（景泰帝）を追頌して，国の活力を回復されることが多かった。臣（王世懋）が考えるところ，郕王（景泰帝）はいちどは皇帝であったものの，憲宗成化帝のなされたように，郕王（景泰帝）に「宗」を贈って，明朝歴代の皇帝を祭祀する宗廟に入れなかったのは，過ちではなかった。それは，重大な決定事項は何度も改めるべきものではないからである。だから，英宗「實錄」に郕王（景泰帝）を「郕戾王」として附録するのは，矛盾しているようだが，どうしてすみやかに変更すべきであろうか，という。

王世懋は，郕王（景泰帝）の帝號復活を決定したものの，「宗」をあたえて宗廟に入れなかったことは過失ではないとする。重大な決定事項はたびたび変更すべきでないからである。さらに，英宗「實錄」の「郕戾王」を用いた記載も矛盾しているようだがそのままにしておくべきだという。王世懋は，憲宗成化帝の処置を評価しているのである。

では，「郕王」に贈られた諡「戾」はどうなったのであろうか。そのままであった。憲宗成化帝は，「帝號・尊號を復活し，その陵墓の手直しする」ように命じただけである。つまり，憲宗成化帝は，英宗が取り決めた諡の「戾」は，そのままにしておき，形式的に皇太后（宣宗

宣德帝の皇后孫氏（英宗の生母）が降格を命じた「郕王」という立場には変更を加えず、「景帝」と名乗ることを認め、その帝としての帝號・尊號を取り決めたのである。憲宗成化帝は、英宗が郕王に贈った諡の「戾」字を変更したわけではない、皇帝に復活させて郕王に対して新たに皇帝としての帝號・尊號を贈っただけである。しかも、このことは天下に告示されなかった。さらに、廟號はなく（明朝歴代皇帝の廟（宗廟）に入れて祭祀しない）、太祖洪武帝以外の明朝の皇帝に贈られる慣例の十六字の尊号は四字の「恭仁康定」に限定され、諡號を含めて「恭仁康定景皇帝」ということにした。ただし南明政權の崇禎十七年（順治元年）七月三日になって、ようやく「代宗」という廟號が贈られる。清朝になると、廟號は認められず憲宗成化帝の取り決めた「景帝」という称号が用いられる。

この決定について、臣下はどう反応したのであろうか。たとえば、商輅（字は弘載、字は素庵。永樂十二年（一四一四）～成化二十二年（一四八六）。浙江淳安の人。正統十年乙丑科（一四四五）一甲一名の進士：明朝を通じてただ一人の郷試・會試・殿試すべての首席合格者）はつぎのように喜んだ、と門人の王獻（字は惟臣、号は退菴。浙江錢塘（仁和）の人。景泰二年辛未科（一四五）二甲三十六名の進士）の「行實」にいう。

乙未（成化十一年：一四七五年）夏四月、〔商輅は〕命ぜられて文淵閣大學士を兼ね。冬十一月、詔もて景皇帝の號を復す。初めて群臣に下して議せしむ。太監の懷恩等を遣りて内閣に至り、公（商輅）等に問わしむ。公（商輅）力めて當に復すべき所以の故を陳ぶ。言 甚だ剴切（切實、懇切）たり。左右 皆な泣き、公（商輅）も亦た泣く。上（憲宗成化帝）聞き之が爲に感動す。疏 入り、遂に其の請を允さる。公（商輅）手を舉げて額に加えて曰く、皇上（憲宗成化帝）の此の舉は、堯・舜の聖徳なり、と（「榮祿大夫少保吏部尚書兼謹身殿大學士贈特進光祿大夫太傅諡文毅商公行實」）。⁷⁾

成化十一年四月、商輅は命ぜられて文淵閣大學士を兼ねた。十一月に景泰帝の帝號を復活するようにと詔が下された。そもそも、憲宗成化帝は、この景泰帝の帝號について、臣下に議論して提案させようとした。そこで、宦官の懷恩などを内閣に派遣して、商輅などに下問された。商輅はつとめて復活させべき理由を述べた。その発言は切実であった。周りのものたちは泣き、商輅も泣いた。憲宗成化帝はこれを聞き、感動した。提案がなされ、認められた。商輅は額に手をあてて、皇上（憲宗成化帝）のこの行いは、堯・舜の聖徳のようである、と言った。

これによると、商輅たちの提案が認められて、帝號が復活したかのようにと理解できるかもしれない。

だが、すでに検討したように、この提案は、憲宗成化帝自身から唐突に命令がくだされている。商輅が事前に内示を受け、憲宗成化帝の提案の内容作成にかかわったことは考えられるが、商輅が切実な意見を述べ、憲宗成化帝がそれに感動して、帝號復活が決まって行ったとは理解しにくい。

また、内密の議論であったためなのか、いま目撃できる商輅の文集には、商輅が帝號復活に

ついて述べた切実な意見らしきものは見当たらない。その上、管見の及ぶ限りでは、憲宗「實録」にもそれらしき記録は見当たらない。

そもそも、商輅は景泰年間の内閣にいて郕王（景泰帝）に仕えていた人物である。門人の王獻の伝えるとおりだとすると、こうした限定的な郕王の帝號の復活だけでも涙を流して喜んだとされるのは、当時の宮廷においてかつて仕えていた郕王に対して否定的な感情が満ち溢れていたためであろうか。もしくは、郕王（景泰帝）に仕えていた商輅が保身のため、憲宗成化帝に媚び諂ったためであろうか。

おわりに

憲宗「實録」は、その最後の憲宗成化帝の治世・行跡を総括した箇所、つぎのように述べる。

……景皇帝 嘗て〔皇太子であった憲宗成化帝を〕沂に封ずるの命有り、天下 之が為に平かならず。〔しかし〕上（憲宗成化帝）未だ嘗て一語も之に及ばず。襄王 郕妃^①を別館に遷すを請うも、許さず。其の女の孤なるを憫れみ、^② 為めに儀賓（宗室の親王・郡王の婿の呼称）を擇びて之を嫁がしむ。言事する者 或いは謂う景泰の舊臣 當に起用する

- ✓ 7) 景泰帝の帝號復活に商輅が賛成したということは、門人の王獻（字は惟臣、号は退菴。浙江錢塘（仁和）の人。景泰二年辛未科（一四五二）二甲三十六名の進士）の「榮祿大夫少保吏部尚書兼謹身殿大學士贈特進光祿大夫太傅諡文毅商公行實」と楊子器（浙江慈谿の人。成化二十三年丁未科（一四八七）三甲一百五十二名の進士）の「商文毅公傳」（成化十一年の個所）に見えるだけである（楊子器の「商文毅公傳」は正徳三年（1508）に書かれているので、王獻の「行實」を参照にした可能性もある）。後に編纂された『商文毅公年譜』（萬曆四十六年（1618）序）には、「成化^③十年^④」のこととして「成化十年甲午、公年六十一歳」条に記されている。

なお、憲宗「實録」（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實録』卷之二百八十・「〔成化二十二年秋七月辛酉（十八日）〕致仕少保吏部尚書兼謹身殿大學士商輅卒」条）に附された商輅の小傳には、このことは記されていない。また、尹直（江西泰和の人。景泰五年甲戌科（一四五四）二甲九十四名の進士）の「明故少保吏部尚書兼謹身殿大學士贈特進光祿大夫太傅諡文毅商公墓誌銘」と姚遷の「大明故少保吏部尚書兼謹身殿大學士贈特進光祿大夫太傅諡文毅商公神道碑銘」にも見えない。

ただ、鄭曉（字は窒甫。浙江海鹽の人。弘治十二年〔一四九九〕～嘉靖四十五年〔一五六六〕。嘉靖二年癸未科（一五二三）二甲四十三名の進士）の『吾學編』には、郕王の帝號復活に係わったと記す。

……〔商輅は、成化〕十一年、文淵閣大學士を兼ね。上（憲宗成化帝）嘗て召見し、從容として議 郕王の監國の時の事に及ぶ。公（商輅）言う「景泰〔帝は〕、社稷に功有り。當に帝號を復すべし」と。左右の聞く者 皆泣く。上（憲宗成化帝）も亦泣く。遂に詔を下して尊諡を上つる……（萬曆二十七年鄭心材刻本『吾學編』第三十六・皇明名臣記・第十五卷・七葉・「太傅商文毅公」条）。

こうしたことから、『明史稿』・『明史』には、商輅の意見に従って、決定が行われたかのように記されるようになる。

……帝（憲宗成化帝）將に郕王の位號を復せんとし、廷議に下す。〔商〕輅「〔郕〕王は社稷に功有り。位號は當に復すべし」と極言す。帝（憲宗成化帝）の意 遂に決す……（『明史』列傳第五十九・「商輅」・十七葉；『明史』明史卷一百七十六・列傳第六十四・「商輅」・十七葉～十八葉も同じ）。

べからず、と。〔憲宗成化帝は〕拒みて聴かず。後、竟に帝號を復し、歲時の祭告（祭祀）諸陵と等し。盛徳なるの事、曠古（古来）^{なみ}無する所なり……（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏徳聖孝純皇帝實録』卷之二百九十三・「成化二十三年八月」条末）。

①景泰帝の皇后であった汪氏。景泰帝が、皇太子であった憲宗成化帝を自分の子に変更しようとした時、反対する。そのため、皇后の地位を廢される。

②〔天順八年正月〕庚辰（二十七日）、襄王瞻埜 奏すらく、「近ごろ聞くに徳王（英宗の第二子）及び重慶公主（英宗の長女）外府の第に出居す、而して郕府王妃（景泰帝によって廢せられた汪皇后）は尚お其の間に參住し、往來朝謁す。恐らくは未だ便ならざる有り。請う別所に遷して宜しきと為さんと。上（憲宗成化帝）曰く、「叔祖の言う所 良に是なり。但だ郕王妃 寡居し、孤女 未だ嫁せず。始め西内より外第（もともと郕王府）に遷居さす。盖し先帝（英宗）の盛徳の事なり。今、^も若し他に徙せば歸する所無し。其れ復た徙すこと勿れ」と（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏徳聖孝純皇帝實録』卷之一・「天順八年正月庚辰（二十七日）」条）。

景泰帝の時に、皇太子であった憲宗成化帝は皇太子から沂王に地位の変更を命ぜられた。そのため、天下は不満に思った。しかし、憲宗成化帝は一言もそのことに言及しなかった。王府の襄王が景泰帝のもとの妃（景泰帝によって廢せられた汪皇后）を別館の遷すことを願い出たが、認めなかった。また、その娘の独身のままであることを哀れに思つて、婚姻相手を選定して嫁がせた。憲宗成化帝に提言する者たちのなかには、景泰帝に仕えていた官員は用いるべきでないとし出た者もいたが、拒んで聞き入れなかった。後に、景泰帝の帝號を復活し、陵墓の祭祀も他の皇帝と同じようにした。徳を極められたことは、古来無かったことである、という。

このように、景泰帝の帝號の復活（皇帝と呼ぶことを認める）したことは、憲宗成化帝の盛徳を示す決定であったと称賛するのである。

ただこの決定は、景泰帝の帝號を復活（皇帝と呼ぶことを認める）し、陵墓の祭祀も他の皇帝と同じようにしたということにのみ焦点が当てられ、憲宗成化帝の盛徳として評価されてゆく。それは、たとえば陳建（字は廷肇、号は清瀾。廣東東莞の人。弘治十年〔一四九七〕～隆慶元年〔一五六七〕。嘉靖七年〔一五二八〕の舉人）の『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』（嘉靖三十四年（一五五五）陳建序）は、郕王の帝號の復活などの決定を「成化十年十一月」に掛け、商輅の發言なども加えて、つぎのようにいう。

〔成化十年〕十一月、郕王の帝號を復し、尊諡を上つりて「恭仁康定景皇帝」と曰う。是れより先、上（憲宗成化帝）景帝の位號を復せんと欲し、太監の懷恩を遣りて内閣に至り議せしむ。商輅等 力めて之を贊う、〔商〕輅 手を舉げて額に加えて曰く、皇上（憲宗成化帝）の此の舉は、堯・舜の盛徳なり、と。明日、遂に文武の群臣に敕諭して曰く、曩^き者に、朕（憲宗成化帝）の叔の郕王 踐阬し、戡難（禍乱を取り除く）して邦を保ち、宗社を奠安（安定）すること、亦た既に有年（多年）なり。寢疾（病臥）して彌留（長患い）の際に屬し、姦臣 功を貪りて事（問題）を生（起こす）じ、妄りに讒構（讒言を行ない

他人を陥れる)を興し、帝號を去らんことを請う。先帝 尋いで誣枉なるを知り、深く悔恨を懷き、次(順次)を以て姦を法に抵つ。^あ[しかし英宗は]不幸にも上賓し、未だ舉正(過ちを正す)に及ばず。朕(憲宗成化帝)大統を嗣承し、茲に一紀(十二年)なり。敦く親親(親族への恩情を尽くす)を念い、用って先志を成す。其れ郕王は、^{もと}舊の皇帝の號に仍る可し、と。遂に尊諡^{たてまつ}を上つる、^{しかい}云う(『皇明歷朝資治通紀(皇明通紀)』卷之二十二・「甲午 成化十年」条)。

そして、つぎのようなコメントを附している。

按ずるに、景泰の廢易儲宮は、憲廟(憲宗成化帝)以て憾みと爲さず。而して先志(英宗の意志)を追成し、其の位號を復し、加えるに美諡を以てす。真に帝王の盛徳なり(『皇明歷朝資治通紀(皇明通紀)』卷之二十二・「甲午 成化十年」条)。

郕王(景泰帝)の憲宗成化帝に対する処置を恨みに思わず、父の英宗の意志を継承して、郕王(景泰帝)の帝號を復活させ、諡まで贈ったことは、「真に帝王の盛徳なり」と評価するのである。

さらに、清の乾隆帝も、つぎのようにいう。

……憲宗 能く前事(皇太子の地位を郕王(景泰帝)によって剥奪されたこと)を以て介懷(意に介する)せず。[郕王(景泰帝)の]帝號を復し、尋いで諡を加え、陵を修むを命ずるの詔旨あり。亦た藹然(盛んな)たる仁義なり。景泰に于いて親親の情(親族への恩情を尽くす)を敦くし、英宗に于いて繼述(繼承)の大を成す。稱す可きなり……(『御批歷代通鑑輯覽』卷一百六・「成化十一年十二月、改諡郕戾王爲景皇帝」条の批文)。

やはり、郕王(景泰帝)の処置を恨みに思わず、帝號を復活させ、諡を贈り、陵墓を修復させたことは、大いなる仁義であり、「稱す可きなり」とするのである。

ところが、これまで検討してきたように、憲宗成化帝はもともと廟號の復活(明朝歷代皇帝の廟(宗廟)に入れて祭祀する)は認めなかった。ましてや、父の英宗が「郕王」に贈った諡の「戾」を変更する気持ちは持ち合わせていなかった。ただ、最初に皇太子に冊立した第二子が早世したことから、第三子(後の孝宗弘治帝)を皇太子に冊立するにあたって、その無事の成長を願って、限定的な意味で景泰帝の帝號を復活するよう命じただけであった。

帝號を復活させる(皇帝と呼ぶことを認めた)ことにより、父の英宗が「郕王」に贈った諡の「戾」を変更することなく、皇帝としての諡號を贈ることが可能になる。父の英宗にたいする孝を保ちつつ、皇太子のすこやかな生育を祈願できるのである。

その上、太祖洪武帝以外の明朝の皇帝に贈られる十六字の尊号を、四字の「恭仁康定」に限定し、諡號を含めて「恭仁康定景皇帝」とし、さらに帝號の復活の詔を公示させなかった。また、郕王(景泰帝)を皇帝の廟(宗廟)に配置することは認めなかった。これは、やはり憲宗成化帝の景泰帝に対する感情があらわれているといえるのではないだろうか。

On Ming Emperor Jingtai's Posthumous Names

Kunio TAKINO

Abstract

This paper investigates the matter of the posthumous name of Ming Emperor Jingtai (1428-57; reigned 1449-57) being changed three times. The result of the research shows that each of the various posthumous names reflected the feelings that each of the emperors who bestowed the posthumous names had toward Emperor Jingtai.